
赤い秘石

阿楠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い秘石

【Nコード】

N 8 6 1 7 U

【作者名】

阿楠

【あらすじ】

ブルン暦4423年、それは天から降りてきた。

それは赤く輝く石だった。

それは溢れんばかりの魔力を有していた。

人々はそれを秘石“レッドストーン”と呼んだ。

不死の靈薬、富と権力の源。秘石の持つ様々な噂は世界を魅了した。

秘石が地上に落ちて500年、多くが秘石を探して旅立った。

人も、国も、人ならざる者も大陸中を駆け回った。
しかし石は見つからない。

世界は未だ“レッドストーン”を探し求めている。

物語の舞台と登場人物（前書き）

物語の登場人物と舞台の設定を少しだけまとめたものですので読み飛ばしていただいても問題ありません。

一部原作にない設定を後付したり変更したりしています。原作ファンの方の中にはお気に召さないものもあるかもしれませんが、ご理解ください。

また、「ここがわからない」「もっと詳しく書いてほしい」などのご意見がございましたらできる限り応えていきたい考えていますのでご連絡ください。

物語の舞台と登場人物

赤い秘石を巡る人々の話 設定

<登場人物>

(1) 個人的に特別扱いしている面々。

ホルン(16)：サマナー

ブリッジヘッド出身。現在はシュトラセラトのレストラン「ブルービストロ」に住み込みで働いている。父親はブリッジヘッドの船乗りで街一番の漁船の船長。夢は冒険家。

グラシア(19)：ランサー

(自称)フルディラン大陸の遙か南に位置する「雪と氷の大陸」に住む「氷原の民」の族長の一人娘。“レッドストーン”を求めて遙々フルディラン大陸に渡って来た。

(2) 脇役のみなさん

ボーダーの男性

ボーダージャケットにボーダーハットの男性。

<簡易地図>

> i 2 7 2 9 1 — 2 3 <

赤点：主要な都市 黄線：主要な街道 緑：森 茶：山脈
その他多くの町、道、森、山などがある。

<地理・地名>

フルディラン大陸：この世界にいくつかある大陸の一つ。この物語は主にこの大陸の極東地方で展開される。

フルディラン大陸極東地方：古くから文明的に栄えた地域で、“レッドストーン”の伝説が生まれた場所。主な移動手段は馬や馬車。また、フルディラン大陸極東地方は南半球に位置する。

雪と氷の大陸：南極に位置する巨大な大陸。他大陸との交流は基本的にない。

<国>

ゴドム共和国：極東地方最大の国家。首都は神聖都市アウグスタ。ブルネンシュティグ、シュトラセラト、ブリッジヘッドなどの大都市を有する一方で、極端に閉鎖的な都市、集落も持つ。

ナクリエマ王国：ゴドム共和国と双壁をなす極東地方第二の大国。ビガプールを王都として王制を敷いている。

エリプト帝国：かつてフルディラン大陸中部に位置していた大帝帝国。500年前、“レッドストーン”を巡り地下界に住む悪魔たちと争い滅ぼされた。

<魔法>

この世界で魔法というと大きく二つある。一つは火・水・風・土の4元素（光・闇を加えて6元素とすることもある）を操り、非科学的な現象を起こすもの、もう一つは4（6）つの元素のうちのどれか一つ、もしくは二つ以上を司る神獣と共感し呼び出す『召喚』である。前者は学問的な面が強く、多くのウィザードはこの手の魔法を操る。後者は遥かに感覚的であり、センスがなければどんな修行をしても習得することはできない。また、『召喚』を行える者はサマナーと呼ばれ、その数は決して多くはない。

<神界・地下界>

人間が住む地上界とは別の世界。神界は天に、地下界は地下にある
と言われているが定かではない。神界には神々と神獣、そして多く
の天使が住まい、地下界は主に悪魔の棲む世界である。

物語の舞台と登場人物（後書き）

いずれこの情報も増えていく予定です。

第1話（前書き）

こんにちは。阿楠といます。

頭の中に広がっていた妄想を文章にしてみようと思い、稚拙な文ながら投稿させていただきました。

内容はオンラインゲーム「レッドストーン」の二次創作です。ただ、自分に都合のいいように歴史や設定を変えたり足したりしています。

登場（予定）人物を増やしすぎてしまい収拾がつかなくなる可能性がありますが、楽しんでいただけたら幸いです。

二次創作の上、ジャンルはファンタジーなので明記するまでもないですが、この物語はフィクションであり、実在の人物、団体、出来事とは一切関係ありません。

第1話

ブルン暦4999年7月11日 ???

浅い眠りから目を覚ます。

ゆっくりと辺りを見渡す。

・・・眠りにつく前と何も変わっていない。

天井にぶら下がる明かりは質素な物ではないが、照らし出されている光景は決して明るいものとは言えなかった。

涙の跡を残しながら眠る少年、幼子を抱えてうずくまる老婆、すすり泣く声。その全てがこの部屋の空気を沈ませていた。

彼女たちは今、船の一室にいる。老若男女問わず数十人がこの一部屋に監禁されていた。

船が今どこに向かっているのか彼女たちは知らない。この窓一つない部屋に閉じ込められてからもう3日になるのだ。何処に向かっているのかどこか何処を漂っているかすらわからない。

ただこの部屋で揺られているだけだ。

船の舵を握っている者は少々繊細さに欠けるようだ。この船の揺れは生涯最悪と言っても過言ではない。

前後左右、加えて上下に傾く船に身をゆだねて彼女は再び目を閉じた。どうせ寝るくらいしかすることがないのだ。

ただ眠りに落ちる前に少しだけ今までの事を振り返ってみよう。

ほんの少しだけ。

ほんの2ヶ月分くらいだけ。

・・・むしろお世話だっ。

彼女
L
V
・
1
8

第1話（後書き）

駄文をここまで読んでいただきありがとうございました。
文を書くって難しいですね。読み返すたびに手直ししたくなつてきます（実際にしてもいます）。

以前同じくレッドストーン二次創作である「赤い秘石を巡る人々の話」という小説を書いていましたが、あまりに内容がアレなんで未完にもかかわらず思い切って全部書き直すことにした結果できたものが本小説です。

文章力、大まかなストーリー共にはあまり変わっていませんが、前作とは違い主人公を一人に絞ったので読んでいて混乱することはないかと思いますが、正直わかりません。

あと、最後に Lv・XX とか書いてありますが、あくまでストーリー中の目安です。ってかぶっちゃけ Lv・XX って書きたかっただけです。今後、「そのレベルじゃこのスキル使えねーよ」とか「そのレベルでなんでこの程度の敵に苦戦するの？」とかあると思いますが、気にしないで頂けるとホントありがたいです。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、お付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第2話

ブルン暦4999年5月11日 港町シュトラセラト

カフェ・レストラン『ブルービストロ』

ゴドム共和国一お洒落でセレブな都市シュトラセラトの中でも一
際評判のレストラン『ブルービストロ』。彼女は一年ほど前からウ
ェイトレスとしてここで働いていた。

ブルービストロは客の評判だけでなく、スタッフとしても非常に
働きやすい環境が整っていた。給金も良いし職場の仲も良い。また、
彼女のように実家を離れて働く者のための部屋も用意されている。
更に言えば店内の雰囲気落ち着いているせいか、一般庶民も気軽に
足を運べる店であるにもかかわらず髭面の漁師でさえマナー良く
食事をする。事実働き始めてから今までトラブルなど些細なものを含
めても数えるほどしかなかった。

しかし今日はいつもとは違った。
今日は何故か人が宙を舞っていた。

ドスン！と大きな音を立ててボーダージャケットの男性が地に叩
き付けられる。腰をさする彼の前には拳を震わせた大男が仁王立ち
していた。

「てめえ、もういっぺん言ってみやがれ！」

大男は真っ赤に染まった顔を怒りに満たし怒鳴った。今にも二の
手が飛び出しそうな形相だ。対するボーダーの男性は切れ長の目を
忙しなく動かしながら膝を震わす。

「私は、何も……。貴方を侮辱したつもりは……」

大男とは対照的に顔を真っ青にしてキョロキョロと動く目で男性は辺りに助けを求める。

「嘔吐け、この野郎！」

男性の怯えぶりが逆に癪に障ったのか、大男が震わせた手を伸ばす。その手が男性の襟元まであと少し、といったところで大男は後ろから羽交い絞めにされた。

「お客様、店内での乱暴は困ります」

大男を止めたのは店のウェイターたちだった。

「お客様、どうか落ち着いてください」

「お客様、他のお客様のご迷惑になりますので……」

「お客様、……」

「お客様、……」

あつという間に数人がかりで腕や足を抑えられてしまう。その隙にボーダーの男性は震える手足でその場から離れようともがいていた。宙を舞った時に落としたジャケットとお揃いのボーダーのハットを抱えてバタバタと後退るその姿は傍から見れば滑稽だが、当人たちからすれば笑えるものではない。というよりその姿は大男の怒りを更に増幅させたらしい。

「コソコソ逃げてんじゃねえええ!!」

大男が渾身の力で腕を振り回す。

まず右腕を抑えるウェ이터を振りほどいた。次にその右手で左腕にしがみつくウェ이터を引き剥がす。空いた両腕で背中のウェ이터に手を伸ばそうとして・・。

ガーン!と音がして動きが止まる。そしてそのまま床に膝を着いた。

「いい加減にしないよ。迷惑だっって言ってるでしょ!？」

大男が顔を上げると左手を腰に当て、逆の手にはフライパンを握った少女が立ち塞がっていた。

「どうして怒ってるのか知らないけど、自分より弱い人脅かして、苛めて。大人しく食事する気がないならお会計してさっさと帰りなさいよ!それが嫌ならあたしが相手になってやるわよ!？」

客やウェ이터たちが呆気にとられている中で少女は大男に負けず劣らずの大声で啖呵を切った。その小さな体を思い切り仰け反らして大男を見下ろす。と、フライパンの一撃をもらった頭をさすりながら大男が立ち上がった。少女の倍はあるであろう体躯を怒りに震わせ大男は低い声で唸る。

「お前が相手になるだど?小娘が、それなら相手になってみるやあ!!」

瞬間、少女の肩をガツチリと掴むと大男は右の拳を振り上げた。

少女と目が合う。いや、顔を上げた時から一瞬も目を逸らさず睨み合ってきたが、今までとは別の視線が交差したように思えた。そしてそのとき、何故か少女の声が聞こえたように感じた。

『か弱い女の子にフライパンで殴られただけですんで良かったと思えないのかしらね？』

『まったく……。後悔するわよ、あなた』と。

その声を聞いた瞬間、少女の肩越しに何かが放たれ、反応する間もなく大男の顔面に直撃した。それは唯の水の塊であったが大男は鉛のハンマーで打たれたかのように白目をむいて崩れ落ちた。

ホルンが腰に当てていた左手を真っ直ぐに伸ばすと水色の体をした魚のようなカエルのような奇妙な生き物が宙を漂いながら近づき、その腕にじやれる様に擦り寄ってきた。水の精霊『スウェルファア』だ。勿論、先程の水鉄砲はこのスウェルファアの仕業だ。

ホルンは精霊と意思を通じ、使役する召喚士『サマナー』だった。スウェルファアの頭を撫で、「ありがとう」と声を掛けるとパチンと指を鳴らす。すると水の精霊は瞬く間に光に包まれ、その光と共に消えていった。

その瞬間、店中の客が歓声と共に手を叩く。

ホルンは右腕を大きく体の前で回すと気取ったポーズでお辞儀をしてみせ、店の奥へ引っ込んでいった。

その後ろ姿に送られる拍手はしばらくの間収まることはなかった。

その日はそれ以外に大きな出来事はなく、客たちが落ち着きを取り戻した頃にホルンはウェイトレスとしての仕事を再開した。それ

でもホルンがテーブルの前を横切るときにはどの客も彼女に労いと賛辞の言葉をかけた。目立つことはどちらかと言えば好きだが、流石のホルンもその日は肩に疲れが溜まった。店が閉まった後、休憩室でココアを飲みながら彼女は仲間たちと談笑していた。勿論話題は今日のホルンの活躍だ。

「ホルンさんのスウェルファーすごいね。水鉄砲一発でノックアウトしちゃうなんて」

「俺もサマナーになりてーな」。ホルン、どこで習ったんだよ？」

「習ったわけじゃないよ。何か、小さい頃にお父さんに海に連れてってもらった時にいつの間にか仲良くなってただけで正直よく覚えていないし」

「いやいや、普通は精霊と仲良くどころか話すこともできないって。そっいえばサマナーって家系で遺伝するんだろ？親や親戚で他にサマナーの人いるのか？」

「ううん、いないよ。自分でも何だかわからない力だけど、たまたま偶然手にしただけのものだと私は思うな」

「ご家族といえば、ホルンさんのお父さんってブリッジヘッドで一番大きな船の船長なんですか？」

「船長？まさか『アダムス号』のか？」

アダムス号とは北の港町シュトラセラトと南の港町ブリッジヘッドを行き来する連絡船のことである。両都市の間にはダイム内海により隔たれており、陸路で行き来するには馬車でも一月以上かかる。

しかし数百年前に拓かれた航路と連絡船技術により海を渡ること
この間を僅か数日で行き来することができるのだ。そのためこれら
連絡船は両都市を渡る人々にとってかけがえのないものであり、そ
の中でもアダムス号は最も大きく、優雅で、豪華な船舶であった。
一部の貴族たちはアダムス号に乗るためだけにこの航路を行き来す
るという。それ程この船は特別なものであり、多くの大衆の憧れで
あった。同僚の父親がこのアダムス号の船長とあれば、お洒落で評
判のブルーストロのスタッフたちが興奮するのも当たり前前の事だ
ある。しかし、

「違うよ。確かにお父さんは船乗りだけど唯の漁師、アダムス号な
んて立派な船動かせないよ」

とあっけなく否定されてしまった。

「何だ。アダムス号じゃないのか」

「ちょっと、勝手に勘違いしただけでしょ？それに漁師って言うて
もブリッジヘッドで一番大きな漁団の船長なのよ。十分すごいじゃ
ない」

「うん。まあ、漁団って言うても船は一隻しかないけどね。でも普
通の連絡船よりはちょっと大きい船だし、やっぱちょっと誇らしい
かな。そう、来週あたし休みもらって一度ブリッジヘッドに帰るん
だけど、そのときにお父さんの漁に連れてってもらう約束してるの。
漁に行くのなんて久しぶりだからすごく楽しみ」

「漁か。もしかしてホルンちゃん、いつかは地元に戻って漁師に
なるつもりなの？」

「うっん、漁は好きだけど他にやりたいことがあるの」

「やりたいこと？」

「うん。私、冒険家になりたい。冒険家になって世界中を巡るの。スウェルファーと一緒にアウグスタやナクリエマに行ったり、砂漠や洞窟を踏破してその先の世界を見たいと思ってるわ」

「冒険家か。でかい夢だな」

「でもホルンさんらしいね」

「はー。だけど漁に冒険に・・・ホルンちゃんはある女子らしくないね」

ウェイターの言葉に一同は一斉に笑い出した。

「もうっ」と両手を腰に当てながらもホルンも皆と同じように笑った。

ここは本当に働きやすい職場だった。

丁度その頃、フロアから明かりの消えたブルービストロを大通りの向かいから細い目で見つめる男性がいた。痩身の男性の表情はジャケットとお揃いのボーダーハットで伺うことができない。

「召喚士か、あの程度であればわざわざ見に来るだけの価値はなか

つたな・・・」

誰にともなくそう呟くと男性は音も立てずに暗がり消えていった。

ホルン L V ・ 1 5

第2話（後書き）

1話に続き駄文を読んでいただきありがとうございました。
文を書くって難しいですね。読み返すたびに手直ししたくなつてきます（実際にしてもいます）。

以前同じくレッドストーン二次創作である「赤い秘石を巡る人々の話」という小説を書いていましたが、あまりに内容がアレなんで未完にもかかわらず思い切って全部書き直すことにした結果できたものが本小説です。

文章力、大まかなストーリー共にはあまり変わっていませんが、前作とは違い主人公を一人に絞ったので読んでいて混乱することはないかと思いますが、正直わかりません。

あと、最後に Lv・XX とか書いてありますが、あくまでストーリー中の目安です。ってかぶっちゃけ Lv・XX って書きたかっただけです。今後、「そのレベルじゃこのスキル使えねーよ」とか「そのレベルでなんでこの程度の敵に苦戦するの？」とかあると思いますが、気にしないで頂けるとホントありがたいです。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、お付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第3話

ブルン暦4999年5月16日 港町シュトラセラト

アイリスター通り

中心街から北西へ30分ほど歩くと『アイリスター通り』に出る。シュトラセラトの遊び場とも呼ばれるこの通りはその名のとおり劇場や博物館、遊技場などが並ぶ娯楽街だ。このような通りには得てしてろくでもない者がいるものである。

ホルンは店の仕事で消耗品の買い出しに出ていた。行きつけの店を巡ると必然的にアイリスター通りを抜けることになる。その日、いつものようにこの通りを歩いていると、道の真ん中に座り込んでいる男がいた。30歳前後だろうか、明らかに酔っ払いだ。連れもないのに声をあげて笑い、道行く人に何やら声をかけていた。

誰もが男を避けて通りの端を行く。何故ならその男の風貌がどう好意的にみてもこの町では好まれない異質なものだからだ。

それは片手に持つ大きな酒瓶ではなく、肩当てと胸当てしか身に付けていないむき出しの上半身の野性味でもなく、男が携えている身の丈ほどもある巨大な大剣の存在感であった。もちろん泥酔して地べたに座り込む姿も、半裸としか言えないような服装もこの町では好まれないが、その剣の圧倒的な威圧感、世話焼きな性格のホルンでさえ関わり合いたくないと思うほどの異様さを放っていた。

ホルンも他の人々と同じように男を避けて道の端を通る。目を合わせないように、関わり合わないように。

それにしてもあの剣の迫力は凄い。おそらく世界中を巡ってもこれほど大ぶりの剣は中々お目にかかれないだろう。そう考えるとホ

ルンの中の好奇心が頭をもたげた。

『気になる』

男に近づくほど、好奇心は大きくなる。その好奇心を必死で抑える。

男の横を通り過ぎる。不自然ではないように。しかし出来るだけ静かに、目立たず、速足で。

男の横を抜けて二歩、完全に男の背後にでた。もう完全に死角に入っている。

足を止めずそつと振り返る。最後に一目、あの剣を目に焼き付けておきたい、そう思ったから。

・・・男と目が合った。

・・・何故か相手もこちらを振り返っていた。

・・・完全に足が止まってしまった。

・・・冷たい汗が一筋、背筋を流れるのがわかる。

「どうした、嬢ちゃん？」

声を掛けられる。

「いえ、なんでもありません」

声が震えているのが自分でもよくわかる。

「どうした、怖がんなよ。別に取って食いやしねえさ」

『いや、どう見ても怖い。』その場にいる誰もが内心思っただろう。少なくともホルンは心の中で悲鳴を上げかけていた。と、ホルンではない別の誰かの悲鳴が「キヤー——！」辺りに響いた。次いで別の誰かの叫ぶ声。

「逃げろ！食われるぞ！」

声は通りの先から聞こえてくる。いくつもの悲鳴と叫び声が上がリ、同時に人垣が割れた。そして割れた人垣の中を一頭の獅子が駆け抜け、こちらに向かってくるのが見えた。

もはや人波は完全に端により、通りの真ん中に残されたのはホルンたち二人のみになっていた。また、獅子も二人の目前まで来ており、興奮と警戒の入り混じった眼で行く手を遮る者たちを睨みつける。

「あー？なんだありや、見世物小屋から逃げてきたか？」

大剣の男は獅子を見ても慌ててはいない。剣を頼りに立ち上がるとホルンを背中に隠すようにして獅子の前に立ち塞がった。

「可哀そうだが、放っておくわけにもいかないしな。悪いが相手になってもらうぜ」

僅かに口元に笑みを浮かべて男は剣を構える。

・・・剣を構えて、・・・そして崩れ落ちた。更には手から剣がこぼれ落ちた。

「……おう？……え？ いや、そんなに飲んでないだろ？」

誰にともなく呟き、男は再び立ち上がろうとする。

しかし立てない。剣もしっかりと握れていない。男は完全に酔っぱらっていた。

獅子が一步近づく。

男が再び剣を落とす。

更に一步近づく。

もういつでも男に飛び掛かれる距離だった。しかしそこで獅子は歩みを止める。いつの間にか両者の間に割り入っていたモノがいたからだ。

宙を漂う水色の“ソレ”はつぶらな瞳で精一杯のガンを飛ばす。

また、“ソレ”とは別にもう一人、男の前に進み出る者がいた。

「スウェルファアに任せて下がっててください」

ホルンは先程までとは逆に男を隠すように立ち、そう言った。

「おい。」と言いかけて男は口を閉ざした。スウェルファアが明らかにただの生き物ではないことに気付いたからだ。

周囲に緊張が走る。僅かに後、動いたのはスウェルファアだった。獅子めがけて勢いよく水鉄砲を吹き付ける。しかし獅子は難なくそれを避かし、逆にスウェルファアに飛び掛かってきた。鋭い爪を生やした腕を叩き付けるように振り下ろす。その爪が届くか届かないかという瞬間にスウェルファアの体が急激に膨張した。

もともと丸みを帯びていたフォルムが瞬く間に真ん丸に変化して

いく。それと同時に小さな棘が体中から生え出した。その棘が獅子の掌に刺さる。

途端に飛び退く獅子にスウェルファアはすかさず追撃を掛けた。

口から先程とは違う色の着いた液体を吹き出す。その液体は身を翻し逃げようとする獅子の体に触れると一瞬で気化した。それと同時に獅子の体から力が抜けていく。

液体は即効性の神経毒を含んでいた。死にはしないが触れれば四肢が痺れ、数秒で身動きが取れなくなる。この毒は獅子にも効果があるようだ。数歩進んだところで地に伏せ、獅子はダルそうに頭を垂れた。

ホルン L V ・ 1 5 大剣の男 L V ・ ? ? ?

第3話（後書き）

1話、2話に続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第4話

ブルン暦4999年5月29日 フルディラン大陸、南海

スー、ハー スー、ハー フウ

何度目かの深呼吸の後、ホルンは満足そうに小さく息をついた。秋も終わりに近いこの季節、一晩冷された空気は一段と透き通っていて美味しいと思う。ホルンはこの朝一番の空気が好きだった。そのために誰よりも早く朝食を食べ終え、デッキ出ていくのがこの船に乗っている間の彼女の日課だった。

彼女は今、父親が指揮する漁船にいる。数十人のクルーを乗せた船はブリッジヘッドを出航して数日になる。もうあと数日このあたりの海を巡った後、船は街へと帰って行く予定だ。この極僅かな日数の漁でも父親に同行を許可してもらうには骨が折れた。それでもなんとか頼み込んで彼女は大好きな漁についてきていた。とはいえホルンが漁師たちにまざって網や竿を引くわけではない。やることといえば海を眺めたり風を受けたり、邪魔にならない程度に糸を垂らしたり、あとはせいぜい雑用事、つまりは船の隅で遊ばせてもらっている程度であった。それでもここが海の上で船の上であるというだけでそんな些細な事たちがひどく非日常的で面白く感じられた。今も何をするわけでもなくデッキの上でただ潮の香りを浴びている。まだ日は出ていない。夜明け前の海は真っ暗で、その見えぬ先から聞こえてくる波の音は不気味でもあったが、それも含めてホルンは海が好きだった。

「今日もいい風」

大きく伸びをするとホルンは海に向かって祈るように手を合わせ、呪文を唱える。精霊を召喚するための呪文だ。

瞬く間に少女の周りに光が立ち上り、それはやがて一箇所に集約されるとその中から水色の体をした魚のような力エルのような奇妙な生き物が姿を現した。水フグ『スウェルファア』だ。

スウェルファアはふよふよと宙を漂うようにして主の元へ寄ってくるとその頬にキスをした。

「おはようスウェルファア、今日もいい日になりそうね」

スウェルファアは答える代わりにホルンの周りをグルグルと回り始める。

しばらくそうしてスウェルファアと戯れていると、船内から数人のクルーが出てきた。眠そうに眼を擦りながら彼らは漁の準備に取り掛かる。もうしばらくすると更に多くの人々が出てきて朝の漁が始まるのだ。

不意にスウェルファアが主の傍を離れ、デッキから乗り出すようにして海を眺め始めた。ホルンも同じように海を眺めてみる。海は闇色でしかない。それでも船からの僅かな光は波の飛沫を反射させている。その小さな明かりを頼りにホルンは目を凝らす。何度もスウェルファアの視線の先を確認し、彼が見ているものを探す。

すると闇に慣れてきた瞳が一瞬、波の変化を読み取った。

そこには一隻の小さな船が漂っていた。中には人のようなものが乗っているように見える。

「見て！船がある！誰か乗ってるみたい！」

ホルンは網の手入れをしている船員に向かい叫んだ。

すぐに数人の漁師たちが集まり、手にしたライトでホルンの指差す海を照らした。すると確かにそこには小さな小舟が波に漂っていた。中には人が一人、毛布にくるまっているようだ。

「おうい、大丈夫かあ！」

漁師の一人が声を掛けるが返事はない。それどころか相手はピクリとも動かない。

「誰かロープもってこい！あんな子船でこんな海まで来られるわけねえ、漂流だ」

デッキ上の騒ぎに船内にいた他の船員たちもわらわらと集まってきたはこの非常時に対応すべく声を張り上げ体を動かす。こんな時海の男たちの行動は迅速だ。船長でもあるホルンの父親の指揮で毛布の人物はすぐに小船ごと船に引き上げられた。

「ひでえ弱ってるな」

「だが死んじやいない」

「まだ若い子じゃないか。どうしてこんな所に？」

引き上げられたのは頭からつま先まで毛皮をまとった少女だった。ホルンより少しばかり年上だろうか？顔も唇も真っ青、頬もすっかり痩せこけていたが端正な顔立ちをした少女である。

「ほら、のそのそしてないでさっさと医務室に運べ！用のない奴は仕事に戻るんだ」

漂流者の顔を好奇の目で代わる代わる覗き込むクルーに呆れ、船長は手を叩いて仕事を促す。その言葉に船員たちは渋々散っていった。

「ホルン！お前はこの子に付いていつて目が覚めるまで見てやつて
る。あとは船医の指示に従え」

船長は娘にそう言うとお大柄な体に似合わぬ早足で船内に戻って
く。さきほど回収した小船の荷物にチェックを入れるためだろう。
あれで意外にマメな男なのだ。

ホルンは医務室に入ると引き上げられた少女を改めて眺めてみた。
黄金色の髪は潮風を浴びて荒れていたが、誰もが美女と褒めるで
あろう彼女の顔立ちと合わさると不思議と気品を感じられた。その
顔が疲労と寒さから色を失いつつあることはもちろん、見たことも
ないほど分厚い毛皮の服を纏ったその姿がホルンにはとても異様に
見えた。

「あなた、だれなの？」

ベッドに横たわる漂流者の髪をなでてみるが答えは返ってこな
かった。

ホルン L V ・ 1 5

第4話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第5話

ブルン暦4999年5月29日 フルディラン大陸、南海

快晴

「・・・暖かい・・・」

「・・・明るい・・・」

お腹すいた

目を覚まして最初に見えたものは不規則に揺れる裸電球――。
次にこちらを覗き込む女の子の顔。

・・・何か言っている。

「――」

――聞こえないよ。

「――」

――聞こえないよ？

「――て――か――?」

だんだん音が聞こえるようになってきた。

二人の人間の話し声のようなものがぼんやり聞こえる。

「聞こえないのかな?どうしようか?」

『聞こえてるよ――』

「き　こえてるよ」

先程の少女と目が合った。

「起きた!起きたよ!」

少女が叫ぶと白衣を着た老人がやってきて顔を覗き込む。

「お嬢ちゃん、大丈夫か?しっかりしなよ」

「私、お父さん呼んでくるね」

少女が部屋を出て行くとき、わずかに潮の香りがした。それにこの揺れ。

「じじ、海の上?」

私は額の汗を拭ってもらいながら問いかけた。柔らかな布の感触が気持ちいい。

「ああ、そうだよ。それにしてもお嬢ちゃんは——」

医者らしい男が何か言いかけたが勢いよく開かれたドアの音がそれを遮った。

「目え覚ましたってのは本当か!？」

ずいぶん早いがおそらく先程の少女の父親だろう。体格の良い男が現れ睨むように私に目をやる。

「喋れるか？」

「——はい」

「動けるか？」

「——少しなら」

「そうか。・・・ホルン、こいつに飯を食わせる。体力の回復が最優先だ」

そう言っ大男は医者 of 老人をつれて部屋から出て行く。
同時に先ほどの少女が洋服を差し出して微笑みかけてきた。

「貴方の服は洗っちゃってて無いけれど、私の用意してあるからそれに着替えて。タオルはこれ使って。あとは・・・大丈夫ね。私、外で待ってるから」

そう言って少女は歯を出して笑って見せる。裏表の無い人懐っこい笑顔だ。少女が部屋を出てから私は用意された服に袖を通すべくベッドから這い出した。

外から「着替え終わったら言ってね。」と声がかかる。

それに「はい。」とだけ返す。

返事は聞こえただろうか？

自分でも驚くほど小さな声に思わず笑ってしまう。せいぜい二、三人乗りの小船で何日かかるかわからない旅に漕ぎ出そうなど無謀もいいところだった。

笑ったら元気が出てきた。その勢いで着替えを終え、もう一度額の汗を拭うと最後に鏡を覗いた。

『ひどい顔——』

こんなにやつれた自分は初めて見る。

髪を整えてドアノブに手をかける。錆びかけたノブを回すと外は潮の香りで満ちていた。その香りに包まれて少女が笑顔で手を差し伸べている。

「思ったより元気そうね。私、ホルン。よろしくね」

「yew x H " glacie R " en lld f p S です。助けて頂いたようで・・・、ありがとうございます」

「ye、glia?・・・まあ、そんな堅くしないで。年変わらないくらいでしょ?」

「19です」

「私、16。やっぱり年上じゃない。もっと普通に話してよ」

そう言つて彼女は私の手を取った。

「食堂はこっち。さっきお父さんが何か作らせるつて言つてたから、もしかしたらもう出来てるかもよ」

彼女に連れられていくつかのドアを横切り真つ直ぐな狭い廊下を歩く。その突き当たりで手を引く少女がドアを開いた。とたんに圧倒的な光が目飛び込んでくる。あまりの眩しさに最初それが何か分からなかったが、すぐに太陽だと気が付いた。

陽光は眩し過ぎるくらい辺りを照らし、目の前で動く人や様々な物に光を注いでいる。お陰でこれが見たことも無いような大きな漁船で、ここはそのデッキの上だとすぐにわかった。

空は青く澄み渡り、海は穏やかに船を揺する。辺りを見渡して私はあるものに気付いた。

デッキの端へより海の向こうを見詰める。

「あれは？」

後からついてきた少女に尋ねる。私が指差す方に彼女は視線を向けた。

その先には島の様なものが見える。

「あれ？フルディラン大陸に決まってるじゃない。今日中には港に入れると思うよ」

「！！」

『——ああ——。ついに来た』

「あれが……。すごい、緑の大陸。……………綺麗」

私は震えていた。ここまで来るのに何日かかったのかも分からないが、やっと辿り着いたのだ。ここは暖かく、きつとあそこはもつと暖かい。そんな気がして嬉しくなる。これならきつと“レッドストーン”も存在する。民のみんなを助けてあげられる。

私は旅に出て以来の穏やかな気分を感じた。と同時に気が緩んでしまった。

——グウ

お腹が鳴った。

「……………」

「……………」

「……………食堂こっちだから」

少女は船内へと続く階段を指差して笑った。

『お腹空いてたの忘れてた・・・』

f	ホルン
p	
S	
L	L
v	v
.	.
1	1
6	5
	y
	e
	w
	x
	H
	"
	g
	I
	a
	c
	i
	e
	R
	"
	e
	n
	l
	l
	d

第5話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第6話

ブルン暦4999年6月3日 港町ブリッジヘッド

その日は本来ならホルンたちを乗せた漁船が港へ帰着する日であった。しかし港にその船の帰りを待つ者はいない。町一番の漁船は予定を繰り上げ五日も前に港入りしていたからだ。

港入りした日の明け方、船は南海沖で一隻の小舟と一人の漂流者を発見した。漂流者の少女はひどく弱っており、船長は彼女の回復を重視し即時帰港を決定したのだ。仕掛けの回収もせずに舵を切り当日中にブリッジヘッド港へ帰着、その直前に目を覚ましていた少女は大事も無かったことからそのまま船長宅で一時預かり、完全回復を待つこととなった。

彼女はグラシアと呼ばれた。これは彼女本来の名前ではない。彼女の本名は何度聞いても船長にも、他のどの船員にも発音することができなかった。そんな中、彼女のミドルネームがかろうじてグラシアと聞こえることから船長の一人娘ホルンがそう呼び始めたのがきっかけだった。

ホルンとグラシアは歳が近いこともあり仲が良かった。出会ってから数日、弱ったグラシアをホルンが良く面倒を見、それにより十年来の友人のような親しさや信頼感を交換していた。二人はこの五日間よく話した。お互いの話はお互いにとっても興味深いものだった。ホルンが特に関心を持ったのはグラシアの出生に関してだった。

グラシアは自身を雪と氷に覆われた大陸に住まう『氷原の民』の族長の娘だと名乗った。そこから広がる遙か海の向こうに存在する大陸とそこで生きる唯一の人々『氷原の民』の話はホルンの心を、そして好奇心を強く揺さぶった。

グラシアは語る。彼女たちの村はかつてない大寒波により甚大な被害を受けている事、このフルディラン大陸には“レッドストーン

”なるモノが存在する事、それを見つけることができれば村と民を救うことができるかもしれないこと、そして“レッドストーン”を求めて一人船を漕ぎ出したことを。

“レッドストーン”とは500年ほど前にこのフルディラン大陸に天より落ちてきたといわれる赤く輝く石のことだ。実際に見たという者は少ないが、伝説、伝承なら数多く伝わっている。その石を手に入れた者は不老不死になるとも莫大な富を与えられるともいわれる一方で、激しい熱と光を放つ為触れることは不可能であるとも語られるその秘石は、この数百年の間大陸に住む全ての人々の興味の的だった。多くの国軍や冒険者が秘石を求めて大陸中を駆け回り、それによりいくつもの争いが起きた。

“レッドストーン”が地上に落ちて500年、秘石を廻る争いこそ稀になったものの、未だ多くの国と人々がたった一つの石を求めて奔走している。

ホルンはその話一つ一つに頷きながら聞いてきた。彼女の話は今まで聞いてきた様々な冒険家の冒険譚よりも突拍子もないものだったが、ホルンには強いリアリティや一貫性を感じさせた。また、逆にホルンが話すフルディラン大陸の話を、それがどんなに常識的なものであっても驚きをもって聞き入る姿からグロシアが確かにこの大陸の外からの来訪者であるとホルンには感じられた。

だが、彼女の話を感じたのはこの五日間でホルンただ一人だった。誰もかれもがグロシアの話を、雪と氷の大陸の話を真に受けはしなかった。それはひとえに『そんな大陸の話を誰も聞いたことがない』ためであつた。確かに南の海を更に南へ舵を切って行けば気温は下

がり、雨の代わりに雪が舞うことも珍しくなくなる。また、その南海の果てまで船を漕いだ者はいない以上その先に何も無いという証拠はない。しかし誰も渡り切ったことのない海を二十にもならぬ少女がたつた一人で渡つて来たなど容易く信じられるはずもなかった。それがホルンには不満だった。誰もしたことがないから、現実的でないから、難しいからという理由で物事が否定されることがホルンはひどく気に入らなかった。その反動なのかもしれない。否定されればされるほどホルンはグラシアの話に引き込まれ、その話を信じていった。そしていつか今度は自分が海を越え、彼女の村を訪れることをグラシアと約束した。結局のところホルンは自身の夢である冒険家に対して、精神的には最高の適性を持っていたのだ。

ブリッジヘッドに来て五日、グラシアは十分に回復していた。そんなグラシアを連れてホルンは街を歩く。新しい友達に自分の街を案内するのはとても楽しかった。街を見渡せる丘や賑やかな市場や行き付けのカフェ、その先々で目を丸くするグラシアの反応が面白く、ホルンは更なる感動を友人に味わわせたいと思いまた別の場所へと彼女を引っ張って行った。

街を案内するのと同時にグラシアの衣類も一式揃えた。何しろ彼女の持つている服といえば真冬でも汗をかきそうなほど分厚い毛皮のコートに毛皮のブーツである。そんなものはどれだけ冬が深まってもフルディラン大陸では必要ない。そのためホルンお気に入り服屋に足を運んだのだが、あれこれ吟味した拳句店の裏から引っ張り出してきた夏物のシャツに袖を通してなお「暑い」とグラシアは言った。

ともあれ服を揃え、遅めの昼食をとり、午後の散歩と称して二人は港の方へ歩き出した。

ブリッジヘッドは港町である。当然港に近づくほど街は活気に満ちてくる。しかしこれが必ずしも不変のものではないとホルンは言った。

「この街にはシーフギルドっていう連中がいてね、そいつらのアジトや倉庫も港の方にあるの。連中揃いも揃ってガラが悪くて皆あいつらのアジトの辺りだけは避けて通るのよ」

「シーフギルドですか。シーフというと盗人のことですよね？この街では盗人にも居を構えるだけの地位があるのですか？」

「うん、最近はシーフっていうと盗人っていうよりも情報を集めたり探し物したり、賞金稼ぎしたりするような人の事を言うのよ。やってることは冒険家と似てるけど、あいつらは自分たちの事を外に漏らさないしどこかコソコソしてるわ。つまり胡散臭いのよ」

そう言って一度辺りを窺うとホルンは声を潜める。

「それにこのシーフギルドは本物。表沙汰にはなってないけど盗みだつてするしそれ以上のことだつてするってこと、皆知ってるわ」

ホルンは明らかに不快そうに眉を寄せる。「それ以上とは？」と聞こうとしてグラシアは口を閉ざした。突如聞こえてきた叫び声に意識を奪われたからだ。

叫び声は遠く何を言っているのかはつきりとは聞きとれない。しかしところどころ「暴れている」「倉庫」などという言葉が理解できた。

「シーフギルドの方だ。」といってホルンが駆け出す。つられてグラシアが後を追う。

人込みを掻き分けて通りを進み、更に裏道を抜けると少しだけ開けた場所に出た。その向こうに三棟の大きめの建物が見える。全てシーフギルドの倉庫だ。そのうちの一つの入り口を遠巻きに何重に

もなつた人垣が囲んでいた。「一体何が。」と二人は立ちすくむ。
そのとき尋常ではない異音が辺りに響き渡った。

ホルン L V ・ 1 5 グラシア L V ・ 1 6

第6話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第7話

ブルン暦4999年6月3日 港町ブリッジヘッド

シーフギルド倉庫前

ミシ ミシ ミシ —

それは千年生きた大樹がへし折られるかのような不快な音だった。その音と共に目の前で建物が歪む。歪に耐えきれずに数枚の窓ガラスが砕け散った。

「何？どうしたの？」

ホルンは人垣に駆け寄ると最後列から見守る男に尋ねた。

「何でも押し入りらしいよ。いや、私も来たばかりなんだけど、中で暴れてる男がいるんだとか」

「暴れてる？人が暴れたくらいで建物があんな壊れそうになるっていうの？」

男は神妙な顔つきで一言「そうだね。」と呟いた。ホルンがあからさまに訝しがった表情をすると別の男がホルンたちを振り返る。

「最近ギルドが雇った用心棒ってのがやたら強いんだとよ。どうやら押し入った奴もそいつと互角に張り合ってるようで、巻き込まれちゃ危ねえってんでギルドの連中もああして外から見守ってんだよ」

そう言って顎をしゃくる先ではシーフギルドの男たちが倉庫の周

りを着かず離れずの距離で囲んでいた。また、この野次馬の群れの前でも数人のギルド員が人垣を抑え、倉庫に近づかないように奮戦している様が見て取れた。倉庫の中からは時折男の怒声や物が破壊される音が漏れてくる。

「押し入りて言っても一人なんでしょ？それで迎え撃つ側も一人つてつまりケンカでこの騒ぎってこと？」

言ってホルンは思わず自分が何か勘違いをしているのではないかと疑った。中から聞こえてくる音は余りに凄まじく、喧嘩というよりは戦争と表現した方が適切ではないかとすら思えたからだ。そんな争いをたった二人の人間が繰り広げていることがにわかには信じられなかった。

ふとホルンの中の好奇心が大きくなった。中の様子を覗いてみたいという気持ちが溢れてくる。ホルンは人垣を押しつけてその最前列まで分け入っていった。そこからはまだ倉庫の中の様子は窺えない。そして目の前には山賊のような面構えのギルド員が睨みを利かせていた。

そつと辺りを見回す。その男以外近場にギルド員はいないようだった。もう一度その山賊面に目をやり、相手がこちらを見ていないことを確認すると即、ホルンは人垣から飛び出した。一足で男の脇を走り抜ける、それくらいの運動神経は十分に持っていた。

が、二足目を踏み出したところで襟を鷲掴みにされた事に気付いた。グイと後ろに引つ張られそのままホルンの体は人垣に放り戻された。顔を上げると山賊面が細い目を更に細めてこつちを睨みつけている。見た目の割に何とも機敏な男だとホルンは思った。

と、そのとき「わっ」という小さな悲鳴が二つほど背後で上がり、その直後に人影がホルンの、いや野次馬たちの頭上を飛び越えていった。

「あ——」と誰かが言う間もなく人影は金色の髪をなびかせて建物の中へ姿を消した。一瞬、というほど瞬間的ではないがその軽やか且つ機敏な動きに誰もがその姿を見送る。

「あれ、グラシアよね？」

その後ろ姿が消えてから数秒後、誰にともなくホルンは尋ねていった。

ホルン L V ・ 15 グラシア L V ・ 16

第7話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第8話

ブルン暦4999年6月3日 港町ブリッジヘッド

シーフギルド倉庫前

どういふ訳かわからないがグラシアは倉庫内へ入って行った。人垣の周りに彼女がいらないことを確かめてから、ホルンは改めてそう確信した。呆氣にとられて良く覚えていないが、あれはやはりグラシアの後ろ姿だったのだ。そう考えると益々ホルンは倉庫の中の様子が知りたくてたまらなくなってきた。しかし先程の失敗以来、彼女のマークは明らかにキツくなっていた。しかたなしに人垣を離れる。騒ぎが起こっている2番倉庫を遠巻きに眺めながらホルンはただ歩いた。そして歩いているうちに一つ妙案が浮かんだ。

「騒ぎのせいで他の倉庫の警備が薄くなってる。1番倉庫に入れば窓伝いで2番倉庫にも潜り込めるかも……。うん、いける」

一人呟いたその言葉は自身を鼓舞するためのものだろう。無断侵入は明らかに罪であり、その一線を越えることに抵抗を感じないはずがない。しかしそもそも彼女は目の前の好奇心を抑えることがさこぶる苦手であった。

何食わぬ顔で2番倉庫から離れる。そのまま1番倉庫の陰に回り窓に手を掛けた。幸いその窓には鍵がかかっていなかった。倉庫としてそれはどうなのかと思いつながら中に忍び込む。窓を閉じると同時に外から人々のどよめきが聞こえてきた気がするが、一線を越えたことによる興奮から全く気にならなかった。人気のない倉庫内を進む。倉庫という性質上窓は少なく、中は薄暗かった。それが心細くてホルンはそつとスウェルファアを召喚する。掌の上に光が

溢れ、水フグが表れた後に霧散して消えていく。その光が消える瞬間、視界の隅で何かが輝いた。

それはボロ布を敷かれただけの棚の上に無造作に並べられた宝石たちだった。僅かに埃を被り、宝石としての輝きは鈍っているように感じられた。ただ、その中で一つ、ホルンの目に留まった石があった。それは他のどの石よりも小振りだった。輝きを放っていることから磨くことはされているのだろうが、カッティングはされていないようで如何にも宝石の破片といった無骨さをしていた。その小さく不格好な石の放つ赤い輝きにホルンは一瞬心を奪われたように感じた。

「キレイ。ルビーかしら」

石に手を伸ばす。何故だかはわからないがそうしなければならぬような気がした。あと数センチ、というところになって背後から聞こえた物音にホルンは飛び上がる。思わず小さく悲鳴を漏らしていた。

そつと振り返る。音は棚を数本はさんだ向こうから聞こえてきたようだ。そこでホルンは自分の目的を思い出した。宝石を見に来たのではない、2番倉庫の様子を探りに来たのだと。そのためにはこの倉庫を抜けなければならない。

ホルンは最後にもう一度だけ宝石に目をやると忍び足で棚の横を抜けていく。三つほどの棚を抜けたあたりでその先から人の気配を感じた。息を潜めて先に進む。棚の脇から覗くと二人の男がそこにはいた。男たちは何やら手提げカバンにものを詰めているようだった。

何となく怪しさを感じホルンはそれを見ていた。別段物音を立てたわけではない。ただ、見ていた。にもかかわらず男の一方が急にこちらに目を向けた。視線は真っ直ぐホルンに突き刺さっている。

「誰だ！」

男は潜めた声で叫ぶ。その声でもう一方の男もホルンの存在に気付いた。

「兄貴、マズいんじゃないですかい？」

後から気付いた男が潜めた声で舌打ちする。兄貴と呼ばれた方は「そうだな。」と呟いて懷に手を入れた。

男はゆっくりとホルンの姿が見える位置に移動する。それと同時に懷から手を抜き出した。その手に握られている物がナイフであることは薄暗い倉庫の中でもすぐに分かった。ホルンは一歩後ずさる。気付けばもう一方の男も同様にナイフを手に行っていた。

数秒のにらみ合いの後、“兄貴”の方が突進してきた。すかさずスウェルファアがそれに反応し、水の玉を吹き付ける。その一撃を難なく躲し、なおも男は向かってくる。スウェルファアには一瞥もくれず、ただホルンのみを狙っていた。

男の振ったナイフがホルンを襲う。左脇腹から右肩にかけて、それを一足飛び退くことで躲した。恐怖で声も出なかった。ただ、追撃のみを恐れていた。

男は一度ナイフを引く。それは決してホルンを襲うことを止めたわけではない。次の一撃のために必要だったただけだ。それがわかっていいたからスウェルファアはもう一度水鉄砲を吹き付けた。

先程よりも近距離から、それは如何にも場馴れしている風なその男にも避けきれるものではなかった。咄嗟に引いた腕で水を受ける。スウェルファアの水鉄砲は見た目に反して重い。男が握ったナイフが掌からこぼれ落ちた。

「このカエルを何とかしろ！」

怒りを頭に、それでも潜めた声で男は後ろの仲間に叫んだ。その迫力に押されたこともあって、ホルンは踵を返し逃げ出す。しかし縛れた足は思うように体を前へと運んでくれなかった。数歩も行かぬうちに襟首を掴まれる。何とはなしに「今日はよく襟を掴まれる日だ」と思った。次の瞬間には腹から床に叩き付けられ、そんな考えも吹き飛んだ。

振り返るともう一方の男がスウェルファアと対峙していた。針を立てたスウェルファアに成す術がないようだが同時にスウェルファアにも何かをさせる隙を与えてはいない。更に辺りを伺おうとしてホルンは自分の背中に異常な重みを感じた。すぐにそれが男が馬乗りになったことによると彼女は理解した。つまり、自分こそ成す術がないということを理解したのだ。

恐怖が増大する。これが自分の最後なのではないかとも思えた。相手は何をするつもりなのだろうか？ナイフを振り抜いたことから傷付けられることは確かだ。傷付けて終わりだろうか？命まで奪おうとはしないだろうか？様々なことが一瞬で頭の端にのぼる。

そんな中、ホルンはどこから漂う甘い香りを嗅いだ。

彼女はその香りを知っていた。故にすぐさま自身の鼻と口を塞いだ。勿論自殺を図ったわけではない。

男は首筋まで伸ばした手を止めた。

見られた、見られたのだ。見られてはならないモノを、この少女に。それ故に覚悟したのだ。今、ここでこの少女の口を永久に閉ざさねばならないことを。そう思いこうして組み伏せ、この手を少女の喉元まで伸ばしたのだ。あとは華奢な首筋を絞めるだけ、それだけだった。しかしここにきて少女は自ら鼻口を覆った。それが不思議だった。恐怖のあまり自ら命を絶つことを決意したのだろうかとも考えた。考えて、そんなこと自分にわかるわけがないと思いつたところで急激な目眩を感じた。

視界が回る。世界のバランスが崩れたようにも感じられた。そのまま倒れ、男は気を失った。

背後で男が倒れたのを感じてホルンは這いずりながら男の下から抜け出した。息を止めたまま数メートル駆け、後ろを振り返る。そこにはスウェルファールと、そして意識を失った男が二人倒れていた。それを確認して更に窓際まで駆けた。窓を開け外の空気を吸い込む息が落ち着くまで何度も深呼吸を繰り返した。

あの甘い香りはスウェルファールからの危険信号だ。香りと共に広がる灰色のガスは吸い込めば数秒で意識を奪うほどの毒性を含んでいた。命を奪うほど危険ではない、が易々と使えるほど安全なものではなかった。薄暗い倉庫内であつたからこそ目に見えず広がったガスにホルンのみが気が付いた。

深呼吸を繰り返すうちに荒い息は多少治まってきたが動悸は一向に止まらない。もう2番倉庫へ忍び込むことなど考えることもできなかった。窓から抜け出し、震える足で倉庫から離れる。足取りはおぼつかなかったがそれでも懸命に動かし続けた。

家に辿り着いたとき、父母は共に不在だった。グラシアもまだ帰ってきてはいない。そのまま自室に入り、ベッドの上で膝を抱く。まだ恐怖は残っていた。しかしそれも徐々に和らいでいる。さつきまではあんなに恐くて仕方なかったが今ではその恐怖心と別の意味でも心臓が鳴っていた。

「あの人たちはあそこで何をしていたんだろう？」

一度口に出して呟き、その先を思考で追った。酷く慌てた風だった。多分、見られたくないモノを私に見られて

狼狽えていた。冷静なようだったが、だからこそ私を襲ってきた。いくつもの推察が頭をよぎる。そして行き着いた。『何かはわからないけど、自分は重大な秘密を握っている。』ということに。

それはホルンにとつてとても愉快な事だった。今日一つの冒険をした、そう彼女には感じられた。それが徐々に恐怖心を薄めていたのは事実だ。

ふと、傍らに佇むスウェルファアの視線に気が付いた。呼びかけると精霊は僅かに口を開ける。その口の中にキラリと光る何かがあるようだった。ホルンの手元まで寄り、口に含んでいた何かをその掌に落とす。

それはあの宝石だった。形も大きさも倉庫で見たまま、しかし明るい部屋で見るとその輝きは格別美しく感じられた。

「スウェルファア、これ！」

驚きつつも咎めるような口調で尋ねられてもスウェルファアは意に介さない。むしろホルンが持つべきものだと言っているようにも思える。

窓の外を見るといつの間にか日は大分傾いているようだった。あと半刻もすれば完全に落ちるだろう。

「仕方ない、明日返しに行こう」

そう言ってホルンは立ち上がる。石をハンカチで包み、上着のポケットに入れた。

それから暫くしてグラシアが返ってきた。日が落ち切るころには両親も帰宅し、それらはホルンの中の恐怖心をほとんど感じられないほど小さくしてくれた。

そして夕食の後、グラシアから明日この街を発つことを告げられた。

彼女は“レッドストーン”を探して大陸を巡るつもりだった。それは重々承知していたがホルンには別れがあまりに急であるように感じられた。自室に招き、「何故？」と問い質したがそれには一言「迷惑を掛けられない。」とだけ返された。その意味をホルンには理解できなかったが、グラシアは頑なだった。

そうして次の朝、一家は数日間の滞在者を見送った。ホルンは泣きはしなかった。急な別れは寂しかったけど、彼女も同様に寂しうだったことがホルンに涙を耐えさせた。

結局グラシアの姿が見えなくなるまで涙を堪え切ったし、最後には強張りながらも笑顔で見送れた。それに相手も笑顔で返してくれたことが嬉しかった。その笑顔がキレイでいいな、と思いながら彼女を見送った。そして家に帰って泣いた。自室で耐え切れず泣いた。それで上着のポケットの事など完全に頭から抜け落ちてしまった。

ホルンLv・17 グラシアLv・17

第8話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第9話

ブルン暦4999年7月8日　ダイム内海

ブリッジヘッドとシュトラセラト間を行き来するには二つのルートがある。一つは半島をぐるりと回り、アウグスタやブルネンシュティグを経由する陸路である。このルートは馬を走らせても一月ほどかかり、今では冒険家でもこの道に行くことは稀だ。もう一つのルートは至極単純、両都市を隔てる海、『ダイム内海』を船で渡るというものだ。航海技術が一般化されて数百年、ゴドム共和国において重要なこの二都市を結ぶ連絡船は二日で人々を対岸へ運ぶまでに進歩した。安い運賃による僅か二日の航海は野盗やモンスターに遭遇する危険性のある街道沿いの旅から人々を救い、それは技術水準や人々の生活水準の向上に大いに貢献している。

当然だがホルンもこの連絡船を利用している。

定期連絡船『モーティシア号』のデッキでホルンは一人もの思いに耽っていた。

モーティシア号は今朝、ブリッジヘッドを発った。予定では50時間かけてシュトラセラトへ入港する。

『今日、明日は船で明後日のお昼頃にシュトラに着くわね。寮に戻ってシャワーを浴びて、その次の日には仕事があるから明後日のうちに買い物に出て・・・』

懐中時計を覗くと短針が港を出たときとは対極を指していた。海上とはいえ、冬は日が落ちるのが早い。あと1時間もすれば辺りは薄闇に覆われるだろう。乾いた音が虚ろだった脳を一瞬で覚醒させたのはそんな時分だった。

『銃声だ！』そうホルンが思い至るより早く、更に数発の発砲音が

船内の至る所から聞こえてきた。そしてホルンのすぐ近くでもその音は響いた。

「動くな！全員静かに床に伏せる！！」

そう叫んだ男の手には銃口から硝煙を漂わせた拳銃が握られていた。それだけではない。気が付けばその男の他にも銃や振広のナイフを手にした屈強な男たちが数人、逃げ道を塞ぐように他の乗客たちを囲っていた。それを理解していくつもの悲鳴が上がる。

「この船は俺たちが頂いた。海に叩き落されなくなったらおとなしく言う事を聞けっ！」

キラリと光るナイフの切っ先に乗客たちは震え上がり、次々に床に伏せてく。その間にも船内からは発砲音が響いていた。

そんな中、襲撃者の隙をついて若い男性が一人、拳銃を握った男に突撃した。モーティシア号の船員だろう。ガツシリとした体格に似合わぬ速さで向かっていく。が、その太い腕に捕らわれるよりも早く相手は反応した。

パン！という音とともに男性の突撃はあっけなく終わった。襲撃者に触れることもなく転がるように倒れこむ。淡い色の制服が見える。見るうちに赤く染まっていくのがホルンにもわかった。徐々に広がっていく血溜まりの中で銃を持った男が再度叫んだ。

「刃向かう者はこうなると思え！分かったら全員床に伏せる！」

床に転がる男性と銃を持って睨みつけてくる男達を見比べ、立ったまま震えていた人々も慌てて床に手を突く。

他の水夫が助けに現れる気配はない。おそらく船内のあらゆる場所で同時に襲撃がかけられたのだろう。最初の銃声から数分、モーテ

イシア号はいとも簡単に制圧されてしまった。

襲撃者たちは手際よく乗客たちを扱う。ホルンたちは武器と手荷物を奪われ船内食堂に放り込まれた。乗客、乗員併せて百人程が食堂の中央に集められ、その周囲を十数人の襲撃者たちが取り巻き、睨みを利かせている。彼ら以外にもまだ数人、もしくは数十人の襲撃者たちが食堂の外にいたようだった。

それからどれほどの時が経っただろうか？恐怖で時間の感覚が失われ始めたことに気付き、ホルンが懐中時計を開くと襲撃から2時間以上の時が経っている。やがて数人の男たちが食堂に入ってくると、監視役の者に耳打ちをした。それを受けて頷くと襲撃者たちは銃で脅しつつ「クルーは全員別室へ移動する。立て」と告げた。

銃口に急かされ、捕らわれていた者の中から水夫たちが腰を上げ、食堂から出ていく。二、三十人が去り、捕らわれた人々の塊は一回り小さくなった。

「シージャックってやつだよ、あれは」

「きつと海賊の一味なのよ」

「これからどうなるんだろうね？」

何度目になるかわからないが、虜囚たちは口を開いたかと思えば同じ言葉を繰り返している。海賊たちの口数は虜囚以上に少ない。先の見えない不安が部屋中に籠っていた。

誰もが不安に満ちている空間、それはホルンが最も苦手とするものの一つであった。彼女は他者と比べるとかなり楽天的な性格をしている。その性格から今までも多くの無茶をしてきたし、今現在も心の中には不安と共に「何とでもなる」という余裕を持っていた。

このポジティブ思考を自身の強みと考えているホルンにとって、重く暗い雰囲気や言葉はそれを否定されているようにも感じられた。だから何の生産性も持たない周囲の言葉には耳を閉ざし、一人現状を打開することを考えていた。

だが、いくら思慮を巡らせても彼女にその術は思い当たらない。不安と絶望だけを口にする周りの人々が武装した海賊への反撃に加担してくれるとは思えないし、そもそもそんな素振りを見せれば奴らはすぐに銃口を向けるだろう。

スウェルファアに頼ることも考えたがそれも駄目だ。ガスを吹かせれば他の虜囚を巻き込むことになるし、水鉄砲では大人数を相手にはできない。

知略をめぐらした策も何一つ思い浮かばない。結果ホルンは他の虜囚共々膝を抱えることしかできなかった。

ドン！

ホルンが頭を使うことに疲れはじめた頃、今日一日でずいぶん聞きなれた音が再び聞こえてきた。それも一発ではない。

ドン！ドン！ドン！ドン！……

数十の銃声が壁を何枚か越した向こうから響く。全てが鳴りやむまでに十秒はかかっただろう。乗客の誰もがその音に怯え、身を竦めた。それでも音がかなり遠くから聞こえてきたからか、悲鳴を上げる者はいなかった。

「船員さん……たちは……？」

恐怖により静寂に包まれた食堂内で最初に口を開けた誰かがそう言った。連れ出された水夫たちは二十人強、銃声もそれくらいではなかっただろうか？それに気づき他の乗客もハッと息を呑んだ。啜り泣く者、おえつを漏らす者も多い。

流石のホルンもこの時ばかりは血の気が引いた。何とかなると考

えていたが、水夫たちは（おそらく）銃弾を受けたのだ。その銃口が自分たちに向かわない保証などない。

やがて耐え切れずに声を上げて泣き出す者も出始める。それに明らかに苛つきながらも海賊たちはただ無言で立っている。泣く者の声もかれた頃、海賊たちはパンの入った籠のみを置いて食堂から出ていった。

扉の向こうでガチャリと音がする。それは虜囚たちの運命が永遠に捕らわれたことを意味しているように思えた。

ホルン L V ・ 1 8

第9話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第10話

ブルン暦4999年7月12日 ???

その日、私は周囲のざわめきで目を覚ました。

眠りについてどれくらい経ったのだろうか？まだ靄がかかった様な瞳を擦り、私は時計を覗いた。
針は4時を過ぎたばかりだと告げていた。

船が横に傾く

『午後？いえ、それはないわね。ということは6時間くらいか。ここに閉じ込められてからこんなにゆっくり眠ったのは初めてね』

まったく、私の神経もずいぶん図太くなった。
覚醒し

きらない意識の中でそ

次は後ろに

んなことをぼんやりと考える。
懷中時計を懷に

しまい、足を伸ばし、

波に持ち上げられて

首を回す。
それで少しずつ意識が明

瞭になってくる。

直後に大きな浮揚感に襲われる

船の揺れから考えると外は大しけだろう。周りのざわめきもそれを心配しているようだった。

この部屋に窓はない。そのため外の様子を窺い知ることが出来ない。でも壁の向こうから聞こえてくる雷鳴や海賊たちの慌ただしい足音と怒鳴り声から、この嵐が彼らの手に余りかねないことが予想できた。

嵐の中を船は進む。流石に余裕がないのか、その日はパンを運ん

でくる者はいなかった。見張り役の男たちもない。部屋にはただ虜囚たちだけがいた。それでも私たちはこの部屋から逃れることができない。部屋の外からかけられた鍵は外しようもなかったし、鋼鉄の扉は破りようもなかった。

正直、胃の中は空っぽだ。もともと満足に食料を与えられてはいないし、最後にパンをかじってからもう十二時間以上は経つ。壁にもたれ、“飢え”というものをほんの僅かに感じ始めた中で私は氣付いた。

——海賊たちの氣配がない。

「おい、おかしくないか？ 奴らの足音が聞こえなくなったぞ？」

「本当だ——。声も足音も聞こえない」

同じように気付いたのだろう。数人が疑問の声を上げている。

「どういうことだ？ さっきまでバタバタと騒いでたじゃないか」

部屋の外が静まったことで虜囚たちの中にまた新たな不安が立ち込める。海賊たちは金品や命を奪う略奪者であるが、今は同時に船を操りパンを恵む虜囚たちの保護者でもあった。

保護者が消えたことに恐怖を感じ、辺りはざわつく。不安に耐え切れず、一人の男が扉を激しく叩いた。

「おい！ 何があったんだ！？ 誰かここを開ける！」

いくら叫んでも返事はない。それでも男は扉の向こうに声をかけ続けた。それにならい更に数人が同じように扉を叩く。

「誰か説明しろ！誰もいないのか！？」

「外はどうなっているんだ！？俺たちはどうなる！？」

「まさかあいつら——」

「——船を捨てたのか？」

その言葉を肯定するかの様に一際大きな雷鳴が響いた。

船は流される。舵取りを失った船の行先を決めるのは波だけだ。しかしこの嵐の中では波さえも正確な行先などわからないだろう。

あれから一日、海賊たちの気配は一度も感じられなかった。扉を叩く者ももういない。今この室内のブームは神に祈ることらしい。ゴドム共和国はそれほど信仰豊かな国ではないが、それでも見渡せば胸の前で手を組む人の姿が目立つ。

それらから目を逸らし私は天井を見つめた。部屋の四隅と中央、そこには一つずつ通気口があった。はじめこの部屋に閉じ込められた時から気になってはいた。人一人くらいなら十分に通り抜けられるであろう大きさの通気口。ただ、食堂の天井は高い。この部屋のテーパーは海賊たちによって全て取り払われているし、数脚の椅子や肩車ではとてもじゃないが届かない。

『それでも出られるとしたら多分あそこから』

そう私は考えていた。

そんな中、波の揺れとは違う違和感を私たちは感じた。

ギギギギ――

同時に聞こえてくる異音、そして衝撃。それが何を意味するのか。

「何かに擦ったぞ！」

先程、一番に扉を叩いた男が叫んだ。

ギギギギギギギ――

木と鉄がひしゃげる音がなおも響く。

「岩か何かに擦ったんだ……。もう終わりだ」

中年の男がそう言つて頭を抱えて泣き崩れるとそれを皮切りに今まで気丈に振舞つてきた者達も次々に諦めの言葉を口にします。

しかしホルンは諦めていなかった。自分でも驚きだが、持つて産まれたプラス思考はこれほどの状況下においても揺るがなかったのだ。

「水が入れば逆にスウェルファアの力でこの扉破れるかもしれないわ。でもその為には水がこの扉まで来なくちゃダメね。今どれほど浸水してるか分からないけど、そんなに傾いてはいないようだしまだまだ時間がかかりそう。でもそれって船が沈むのにも時間がかかるって事だから案外みんな助かつちゃうかも」

私がブツブツと独り言ちていると二度目の衝撃が船を襲った。

船は頭から何かに突っ込んだようで大きく仰け反るようになってしまう。

私たちは皆、思い切り吹き飛ばされ一方の壁に叩き付けられた。

「うわぁ！」

「何だ！？」

人と人がぶつかりそこに椅子も降ってくる。その騒ぎで少ない人数が怪我を負ったようだ。だが今はそれどころではない。

「何が起きたんだ？」

誰もがそう思っただろう。床は大きく傾き、今や虜囚は床ではなく壁に座っている。

「60 は傾いてるんじゃないのか？」

「・・・船が止まってるぞ。陸に乗り上げたんじゃないのか？」

「陸にか！？いや、だがここから出られないことには・・・」

不安や恐怖ではないざわめきが広がる。虜囚たちに初めて希望の光が見えてきたのだ。そんな空気が私を元気にしてくれるように感じられた。だから私はあの通気口を指差し、告げた。

「あそこ、通気口あるでしょ。今なら届くんじゃない？」

視線が一気に私に集まる。そしてそのまま何かを辿る様に移動し、指し示す“出口”を捉えた。

「通気口か。そうだな、今なら届くか・・・」

「よし、俺が行く。あそこから出て、扉の鍵を開けてくるぞ」

そう言つて一人の男が傾いた壁を上つていく。その後を数名の若者が「オレも」「オレも」とついていった。そして意外なほど簡単に男たちは通気口へと辿り着いた。

「待っている。」と告げて男たちは一人、また一人と通気口へ消えていく。

暫くした後、ガシャンと音がして扉が開いた。途端に「おお！」という歓声上がる。

床の傾きは急だったが、私たちはすぐに食堂から脱出できた。そんな私たちに鍵を開けた男たちは興奮した口調で言つた。

「陸だ、陸に着いたぞ。ぶつかつたのはやっぱり陸だったんだ」

それを聞いた乗客達は喜び勇んでデッキに向かう。私も彼らの後についてデッキに出ていった。そこには一面砂だらけの大地が広がっていた。

「ここは・・・どこなんだ？」

「この景色、見覚えがあるわ。多分ネイダック平野のあたりよ。あつちに行けば道に出るんじゃない？」

若いカップルが少しだけ木の生えている小高い丘を指差すと他の乗客も皆一様に目をやった。ネイダック平野、それならフォーリンロードに出さえすればビガプールに繋がっているはずである。

「まあ、まずは腹ごしらえからだろ」

振り向くと食料の袋を抱えた男たちが船内から顔を出したところ

だった。

「とにかく船を降りよう。そこで飯食ったら準備して出発だ」

私たちは頷き、それに従った。

気付けば嵐は止み、ただ風が潮の香りを運んでいた。

ホルン L V ・ 1 8

第10話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第11話

ブルン暦4999年8月1日 ナクリエマ王国首都ビガプール

ビガプール王宮騎士団ビガプール南部地区駐屯所前

「申し訳ありませんが、皆さんを今すぐシュトラセラトへ送り届けることは出来ません。どうかご理解ください」

そう言つて騎士団の男は本当に申し訳なさそうな視線を私たちにかけた。

モーティシア号が座礁して二十日、私たちはビガプールに辿り着いていた。船を発つた当初予想していたよりもいくらか早くここまで来ることができている。それもひとえにラカリフサの人々のおかげだ。

北フォーリンロードを目指しネイダツク平野を歩いて二日、私たちはラカリフサという小さな農村に辿り着いた。その村の人々は疲れ切った私たちを温かく迎え入れ、食事と寝床を提供してくれた。また翌日、村を発ちビガプールへ向かうつもりであつた私たちに、彼らは馬車を貸し与え、更に傷ついた者、体力のない者へはしばらくの療養を勧めてくれた。私たちもその提案を素直に受け、十分に体力のある数名のみでビガプールを目指し、残りの者はそのままラカリフサで迎えを待つことを決めた。そして私は一足先にビガプールへ向かうグループの一人として馬車に乗り込み、今日、ついに仲間たちとビガプール入りしたのだ。

しかし穏やかな雰囲気に含まれていたラカリフサと違いビガプールは物々しい空気に満ちていた。私たちは王宮騎士団や自警団を頼りに救援を乞うたが誰もが二言目には「それどころではない」と返してくる。話を聞いてみるとどうやらナクリエマ国王の末娘が行方

不明となっているらしい。それにより街中が騒然となっているようだ。

街のどこへ行っても姫の失踪の話でもちきりであり、私たちの話に耳を傾ける者はほとんどいなかった。そのためここに辿り着くのにひどく時間がかかってしまった。

しかしやつと辿り着いた騎士団の駐屯所でも姫の失踪事件で手一杯のようで、他国の難破船や漂流者の保護に時間を割く余裕はなさそうであった。

「しかしラカリフサには怪我人も留まっているんだ。頼む」

姫の行方が王宮騎士である彼らにとって最優先であることは十分に理解しつつも、仲間の一人が何とか食い下がろうと拝み込む。

「ラカリフサへは勿論使いを出します。しかしご覧の通りしばらくはこちらも余裕がないのです。まして他国へ馬車で送り届けるのは・。失礼ですが、その馬車に姫様を紛れ込まされないとも言えませんが、不用意には出来ないのです」

私たちは数十分、こうして交渉を続けているが話はどこまで行っても平行線だった。仕方なく出来るだけ早い対応を条件に私たちは引き下がることにした。

この街にどれほど滞在することになるかはわからない。私たちはしばらくの間の滞在場所を求め、宿を探すことにした。時刻は5時近い。西の空はすでに薄らと赤みが差していた。そんな中ふと、視界の隅に移った建物を私は見詰めた。

通りの遥か先、橋を渡った向こうの丘の上。そこに佇むビガプー・ル城に目を向け私は何とはなしに足を止める。特に何かを考えているわけではなかった。強いて言えば『城を見るのは初めてだな』という程度だろう。

ボーッと城を見詰める私を仲間の一人が振り返る。「ん？」と呟いて彼は言った。

「ホルンさん、ここ、ほつれてるよ」

その言葉にハッと意識を戻し視線を彼に移した。見ると胸の辺りをトントンと指で叩いている。私は自分の胸の同じあたりを確かめる。すると上着のポケットの辺りが僅かに焦げてほつれていた。

「ウソ？何これ、いつの間に？」

私は慌ててそこに手をかけた。

と、そこに何か硬い感触を感じる。ポケットの中を検めると一枚のハンカチが出てきた。思わず「あー」と声が漏れる。

ハンカチを掌に乗せ、そっと開いていく。開ききると中から赤く輝く石が現れた。

途端に感情が高ぶってくるのを感じる。まるで走馬灯のように、今まで経験した様々なことが私の頭を、いや体中を駆け巡った。

グロシアと出会って、この石を見つけて、命の危機に瀕して、シージャックにあって、船が難破して、ついにはナクリエマ王国にまで来た。十六年生きてきて今までこれほど多くの経験をした二か月はなかっただろう。そして私は今、見ず知らずの国にいる。親も友人も同僚も今まで頼ってきた人は誰もいない。

気付かぬうちに石から目が離せなくなっている。この石の赤い輝きを見ていると自分の心も真っ赤に染まっていくように感じた。

グロシアは既に旅立った。今もきつとこの大陸のどこかで奔走しているだろう。急激に彼女に会いたくなってきた。この二か月の事を彼女に話したい。彼女が経験した二か月の話を聞いてみたい。それだけじゃない。この世界で行きたい場所、やってみたい事が私に

は山ほどある。なにより私の夢は

「冒険家——」

呟いて私は顔を上げた。まわりでは仲間たちが不思議そうに私と石を見比べていた。

「聞いて。私まだ帰らない」

唐突な言葉に彼らは眉をひそめた。

「帰るって、まだ宿も決まってるぞ？」

「違うの。家に帰らないってこと。シュトラセルトにもまだ行かない」

仲間たちは益々不思議そうに私を見詰める。

「私、旅に出る」

この一言は彼らの理解を越えたらしい。彼らは一様に啞然とした顔を揃えていた。

「私の夢は冒険家。世界を旅して廻り未知の宝を求めて秘境へ分け入ったり、ときには巨大なモンスターと戦う勇敢な探索者。それが私のヒーロー。このチャンスを逃したくないの。だから私は旅に出るの。家には自力で帰るわ」

そう言って私は笑って見せた。仲間たちも「しかし・・・」とは言いつつもすぐに「ホルンなら大丈夫だろう」と頷き、見送ってくれ

た。

産まれて十六年、今まで機会がなかったがただに触れることの無かった夢の世界。それにとうとう手が届いたのだ。

この数か月で感じた肌を刺すような焦りと快感、それをこのまま終わらすなんて絶対にない。あの平和で楽しく、毎日がまあ大した不満も無く過ぎていくだけの日々も捨てがたいが、今はこっち。若いうちはこっち！

「そうよ、まだ若いんだから！」

言うなり私は駆け出した。

父さんや母さんは心配するだろうけど、ブルービストロのみんなには迷惑かけるけど、こんなに面白そうな世界が広がっているのだから。今はこっちの世界で――。

新たな世界で羽ばたこうとする少女を包むのは、落ち着きを取り戻し始めた城下町の夕焼け。彼女の心を写したかのような茜色の空。

ホルン L V ・ 2 0

第11話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第12話

ブルン暦4999年8月18日 ガディウス大砂漠

日差しが強い。

見上げれば空は雲一つなく晴れ渡り、その中心で太陽は陽光を惜しみなく地上へ注いでいた。

普段ならあの輝きに心踊ることもあっただろうが、今はとてもそんな気分になれはしない。砂漠で道を失った今の私にはむしろ嫌味な輝きにしか思えなかった。

「あつつい・・・」

いい加減に見飽きた砂の大地を睨みつけ、私はようやくそれだけ呟いた。

自称冒険家としてデビューした私がまず目指したのは数多くの冒険家を輩出した中規模都市アリアンだ。アリアンはフルディラン大陸極東地方と大陸中部を陸路で繋ぐ都市であり、古くから人やモノの流れの重要な拠点であった。このことからアリアンは人、モノ、情報が必要とする冒険家たちにとって非常に重要な都市の一つであり、ここに何らかの人脈を作ることには冒険家たちが最初にこなさなければならぬ課題の一つであった。

しかしアリアンへ向かうにはある障害を乗り越えなければならぬ。それがここ、『ガディウス大砂漠』であった。アリアンの四方を囲むガディウスの砂原はその過酷な環境でもって周辺都市の発展を著しく妨げている。陸路の要とも言えるアリアンが生活水準では他の主要都市から100年遅れているのもこの砂漠によるところが大きい。それほどガディウス砂漠は広大且つ過酷であった。

とはいえ、本来この砂漠を抜けることは難しいことではない。何

故なら砂漠を横断するプラトン街道が既に何百年も昔に敷かれているからだ。私もつい昨日まではこの街道を歩き、アリアンを目指していた。それが何故今、道を外れて彷徨っているのか。

答えは極単純。

「調子に乗るんじゃないかった・・・」

額を滑る汗もそのままに私は今一度後悔した。

プラトン街道は十分に整備されており、普通に歩けば日に一度はオアシスで水分を補給できた。順調な旅路と初めてのガデイウス砂漠横断に気分を良くした私は昨日軽い気持ちで道を外れ、人の手の通っていない砂原へ向けて歩を進めてみたのだ。それが大きな間違いだった。太陽を見れば方角がわかると高を括っていたが、気付いた時には位置を失い、既に街道へ出ることができなくなっていた。あれから丸一日、水筒の中の水は残り僅かとなり、もはやろくにのどを潤すこともできない。水不足は強い日差しによる脱水と重なって私の体力を大きく削いでいた。

水不足が引き起こした問題はそれだけではない。砂漠に足を踏み入れた当初からだが、スウェルファアの体力が明らかに落ちていた。昨日まではそれでも問題なく宙を漂っていたが、今ではそれもできず、呼び出しても私の腕の中でグッタリと身を横たえるだけだ。原因としてはやはり水しか考えられない。考えてみれば水の精霊である彼が水が必要とするのは至極当然の事なのかもしれないが、水の豊富な港町で過ごしていた頃はそんなこと思ってもみなかった。兎にも角にもスウェルファアの消耗を少しでも和らげるために“あちら”の世界へ彼を返し、私は一人歩き続けた。

太陽の位置から察すると、そろそろ正午を迎えるようだ。少し足を休めようと考え、私は砂の上に腰を下ろした。汗で張り付いた前髪をかきあげ、水筒に口をつける。文字通り命の水はたった一口で底を尽いた。

『水が足りないってのにどうして汗を掻くのかしらね』

フラストレーションを誤魔化しながら私は体を横たえる。砂の表面は日光により熱されていたが一層下の砂はヒンヤリとしていて気持ちよかった。仰向けになると太陽が眩しい。逃げるように視線を逸らすと遙か上空を一羽の鳥が飛んでいた。鳥はクルリと旋回するとそのまま私の視界から消えていく。『連れて行ってくれればいいのに』と考えながら私はその姿を見送った。

今日は一段と太陽が眩しい。

そうして寝転んで20分ほど、何かの気配を感じて私は身を起した。

辺りを見回すが四方のいずれも砂原以外に何も無い。私は立ち上がり、更に周囲を見渡した。しかしやはり可笑しなところは何も無い。それでも一抹の不安を拭いきれずに私はその場を離れることにした。バッグに手を伸ばし肩に背負う。最後に自分の足跡を確認して来た方角とは逆に向かって私は歩き出した。

と、それと同時に目の前の砂中から鞭のようにしなる何かが現れ、私に向かって飛び掛かってきた。間髪を容れずそれは私の目の前で止まり、次の瞬間には蛇が鎌首を上げるかのように引っ込んでいく。

砂中から伸びるそれは人の脚ほどの太さと如何にも丈夫そうな甲殻を有し、その先端には鋭い棘が一本伸びていた。規格外の大きさではあるが、間違いなくサソリの尻尾だ。下にはさぞ巨大な本体が姿を隠しているのだろう。

そういえばガディウス大砂漠のサソリは人をも襲うことがあると聞いたことがあるが、この尾のサイズから考えればそれも納得がいく。

不吉な想像が脳裏をよぎり、私は思わず身を固めた。

『スウェルファアを』と一瞬考えたがそれは駄目だ。今、スウェルファアを召喚しても何の抵抗にもならない。それを悟るとすぐさま私は走り出した。

巨大サソリを迂回して躲し、そのまま撒くつもりで足を動かす。チラリと振り返ると砂中からサソリの本体が姿を現すところだった。人ほどの大きさはあるだろうか？その巨体に似合わず機敏な動きで旋回し、私の後を追ってくる。モンスターの不気味な姿に背筋を凍らせながらも私は必死で走り続けた。

しかし柔らかな砂原は私の足を取り、思うよう前へと進ませてはくれない。このままでは撒くどころかいずれはサソリに追いつかれてしまうだろう。

私は早々に意を固めると足を止め、振り返った。相手はスピードを落とすことなく、真っ直ぐ私に向かってくる。そしてあと数メートルというところでその長い尻尾を突き出した。その一撃をバグを盾に受ける。尻尾の針は深々と突き刺さり、あわやバグを貫通して私にまで届くところだった。そのままバグを捨て、私は巨大サソリに飛び掛かる。手には空になった水筒を逆手に握っていた。

尻尾に付いたままの“重り”に気を取られてか、サソリはいとも容易く私の接近を許す。その無防備な額に私は渾身の力で水筒を叩きつけた。

メシャ という音とともに伝わった衝撃で私の手が痺れる。その衝撃でアルミの水筒はグシャグシャに潰れてしまっていた。だが同時に相手の額にも傷がつき、凹み、裂けた甲殻の隙間から僅かな体液が溢れだしていた。

しかし怯んだのは一瞬、サソリはすぐに体勢を立て直し両手のハサミを振り上げる。対する私もそれを躲そうと身を翻した。と、不意に頭上から巨大な鳥が一羽、赤茶けた羽毛を撒き散らしながら降り立ち、鋭い鉤爪で巨大サソリの頭部を文字通り鷲掴みにした。

鳥はそのままサソリを押さえつけ、その傷口に嘴を突き立てる。途端に殻の割れる音と金属が擦れるようなサソリの奇妙な吠え声が辺りに響いた。その光景に冷や汗をかきながら私はモンスターたちから距離を取る。

やがて完全に動かなくなったサソリを開放すると鳥は首を捻ってこちらに目を向けた。しかし襲ってくる様子はない。それどころか明らかにこちらを意識しつつも何事もなかったかのように空へ飛び立っていった。

「さっきの鳥だ・・・」

空を舞う姿を見て私はやっとそのことに気付いた。鳥は私の頭上を二度大きく旋回するとそのまま南へ飛んでいく。かと思えばすぐに舞い戻り、また私の上で弧を描いた。鳥は暫くそれを繰り返す続ける。ただ、ほんの少しずつ南へ南へと向かっているように感じられた。

「そっちへ行くの？」

一人呟き私は鳥の後を追う。鳥はいつまでも私から離れずに何処かへ導いていった。

ホルン L V ・ 2 4

第12話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第13話

ブルン暦4999年8月18日 ガディウス大砂漠

私は一時呆け、眼を擦り、目を凝らした。

もしやあれが噂に聞く蜃気楼というものではないだろうかとも疑ったが、とてもそうは思えない。“そこ”にあの鳥が降り立つ。やや距離があるが間違いない。鳥は確かに“そこ”に降り立った。思わず顔がにやける。同時に体中の力が抜けた。

オアシスだ――。

「オアシスだー！！」

目の前の光景に疲れも吹き飛んだ私は足場の悪さも構わずに駆けだした。オアシスを囲うように茂る小さな樹林を抜けるとすぐ目の前に豊かな泉が広がっている。半ば飛びつくように泉に駆け寄り、まずは一口掬い上げた水でノドを潤す。水が体にしみこんでいくのが感じられた。次いでもう一口口に運ぶ。水を得たことへの安堵から私の体から急に力が抜けていった。しかし体を休める前にもう一つやらなければならないことがある。

私は胸の前で手を合わせると、そこに意識を集中させる。やがて私の想いに応え、そこに光が溢れだした。その光の中からスウェルファアが姿を現す。

「スウェルファア、水だよ。」

相変わらずグツタリと力ないスウェルファアに私は水を注ぐ。スウェルファアの全身にかけ、口元に運ぶとたちまち彼は元氣を取り

戻した。泉の中に飛び込み、水面から顔を出すと満足そうに彼は鳴く。それを見て私は改めて息をついた。

鳥に導かれて数時間、私はただ鳥を追ひ砂漠を歩き続けた。そのお蔭で丸一日探し続けても見つからなかったオアシスに辿り着き、一つの危機を乗り越えることができた。また、このオアシスはただのオアシスではなかった。ここは街道沿いのオアシスだったのだ。ガディウス大砂漠を渡る人々が旅の疲れを癒し、ひと時の安息を得るオアシス。ここはその一つであった。すなわち、あの鳥は私をオアシスへ導いてくれただけでなく、プラトン街道へとも導いてくれたのだった。

「本当に感謝してもきれいな」

泉の前に腰を下ろし、私はそう呟いた。そんな私をスウェルファ―がまじまじと見詰めている。その視線に気付き、私もスウェルファ―を見詰めた。

「無理させてゴメンね。次から水だけは気を付けるわ。」

スウェルファ―のことを理解しきらず大きな負担をかけたことに負い目を感じていた私は素直に彼に謝罪した。スウェルファ―は相

変わらず鼻から上だけ水面に出してジッと私を見詰めている。やがてそこから口を出すと「ピュー」と私の顔に水を吹きかけた。突然の攻撃に驚いて呆けた私を見て彼はゲロゲロとノドを鳴らして笑う。それはまるで気持ちの落ちている私を励ましているかのような笑い方だった。

「スウェルファア。この、やったな」

スウェルファアの気遣いに気恥ずかしさを感じつつ、同時に楽しくもなってきた私は片足を泉に浸けると思い切りけり上げて彼に飛沫を浴びせかけた。スウェルファアもまた私に水を吹き付ける。服やブーツが濡れることも構わずに私たちは暫くそうしてふざけ合った。

そうしていると不意に背後で茂みを掻き分ける音が聞こえた。振り返ると若い男が茂みから顔を出していた。

「おや、誰かと思えば召喚士じゃないですか。珍しい」

男は人当たりの良さそうにニツコリと微笑みかける。彼の腕にはあの鳥が腕を止まり木にして乗っていた。

「こんにちは。すみません、騒いでしたって」

「構いませんよ。これだけ大きなオアシスなのに他に人がいないので少し寂しかったですから」

「ここ静かですものね。本当にすみません。人がいるとは思わなくて・・・」

二度謝って私は鳥に目を向ける。本当に大きな鳥だ。その鳥がこの温和そうな青年の腕に大人しく留まっていることと、鳥と人のアンバランスさに何とも違和感を覚える。

「鳥使いの方ですか？先程道に迷っていたとき彼に助けてもらったんです」

「この子に？さっき辺りを見回せに行ったときですね。戻るのが遅いので心配していたのですがなるほど、貴方に手を貸していたのですか。」

そう言って青年はその鳥を優しく撫でる。

「私は鳥使いではありませんよ。貴方と同じ召喚士です。彼は風の精霊『ウィンディ』、私のパートナーです」

「精霊だったんですか。どうりで存在感のある鳥だと……。私、ホルンといいます。一応冒険家です。」

「ホルンさんですか。私はクリフ、『ローガン』の王宮に仕えています」

「ローガン？ですか」

「ご存じありませんか？まあ、小さい国ですしね。ローガンはエリプト帝国が崩壊した後にできた大小無数の国の一つです。」

「エリプトですか。それは随分遠くからいらしたんですね。こちらには何の御用で？」

単純な好奇心で私は尋ねる。それに対しクリフは相変わらず穏やかな笑みを浮かべたまま応えた。

「ローガンは旧エリプト領の中では東寄りにありますからそこまで遠いわけではありません。ゴドムには知人に呼び出されましたね。国のためにもなる話とのことで休暇を頂いてこうして足を運んでいるのですよ。少々変人ですが、彼は立派な知識人の一人ですので聞くだけでも価値があるだろうと」

話しつつクリフは近場の岩に腰を掛ける。それにあわせ私も彼に向き合うように座り直した。

「それにしても流石極東ですね。旅先で偶然召喚士と出会うなんて信じられませんよ。」

「え？どういうことですか？」

「ご存じありませんか？エリプトでは……。いえ、この極東地方以外の地域では召喚士として才能を開花させるものなど何千万人に一人程度と言われているのです。ローガンでは偶々私がそうですが、国民の数から考えれば私一人でも奇跡的な確率でして……。しかしこちらでは数十から数百万人に一人は召喚士の才を持っていると言いますし、こんな砂漠のオアシスで召喚士二人が偶然出会うなど流石は極東と感じてしまいますね」

「十から百倍。そんなに差があるんですか？」

思わず驚きと疑惑の混じった声で聞き返してしまう。サマナーとしてゴドムで育ってきた私だがそんな話は聞いたことがなかった。

それに「ええ。」と肯定してクリフは語りだす。

「極東地方、特にゴドムを中心として召喚士が誕生する率が高いようですよ。事実旧エリプト領でも西の方には召喚士は一人もいません。このことと、神界から精霊を召喚するという召喚士の能力、そして“レッドストーン”の噂からこの辺りが最も神界に近い地として語られていますね」

「そうなんですか。“レッドストーン”が最初に堕ちたのが極東だとはよく言われますが、まさか神界に最も近い場所だなんて噂があるとは初耳です」

「現地の人ほど知らない噂というものもありますよね。でも私はこの噂、意外と真実ではないかと考えているのですよ」

言ってクリフは視線を脇に逸らす。その先ではスウェルファーとウィンディが仲良く戯れていた。

「まず一つにこの地に来るとウィンディが普段より活発になること。二つ目にこの辺りが非常に安定した情勢を保っていることが理由なのですが」

彼が視線を私に戻す。

「一つ目は単純ですが神界に近いことでウィンディにとって居心地がいいのではないかと。二つ目に関しては政治的なことや、自然災害に関することで重大な事件が他国より少ないということですね。全くの推測ですが民の暮らしに大きな変化が起らないように神界からの干渉があるのではないかと私は考えています。それとこれは決定的な理由になると思いますが、500年前の悪魔たち

の大侵略で世界中が火の海となったときの出来事が三つ目の理由です」

そこまで話してクリフは一度俯く。その表情はいかにも複雑な思いを持っているようであった。やがて言葉を選ぶようにゆっくりと続きを語りだす。

「500年前のあの時、世界が悪魔たちに焼き払われる中ゴドムは他と比べて明らかに小さな被害を受けただけで済んでいます。勿論小さなと言っても甚大な被害であることは理解していますが……。当時の記録によるとこの地の被害が小さく済んだのは少数の天使が現れ、悪魔の進行を防いだためだということだそうです。少数とはいえあの時天使が降臨したのはゴドム国のみ。このことからこの地が神界の加護を受けていることは明らかではないかと。」

喋りながら声に少しずつ力が入っていつている。

「エリプトはゴドムの隣国でありながら同時に悪魔に滅ぼされた国です。大陸一発展していた国であったのに……。私はローガンの民として、いつかローガンが旧エリプトのように豊かで雄大な国になることを願っています。そして世界から争いがなくなり、全ての人々が幸せに暮らせる時代へと変わっていくことを夢見ています。そのために私の能力が必要ならば惜しみなくこの能力、役立てたいと」

彼はそのまま祈るように手を組み俯く。

博愛。彼のその姿を見て私は漠然とそう感じた。自己の利ではなく国の利、世界の利を求める人。私が初めて出会った他国のサマナーはそんな人だった。

ホルン
L
V
・
2
4

第13話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

第14話

ブルン暦4999年9月9日　オアシス都市アリアン

ビガプールを出発して一月あまり、予定より時間はかかってしまったが私は最初の目的地アリアンに到着した。着いたその日はクタクタで何もできずに宿で寝倒したが、翌日から私は街中のギルドの門を叩いていた。もちろん冒険家として成功するための秘訣とも言えるアリアンでの人脈作りのためだ。

私のような駆け出しの冒険家が見知らぬ地で人脈を得ることは簡単な事ではない。唯一その近道となるのがギルドへの加入だった。ギルドとは目的や志を共有する者たちの相互扶助の場だ。完全に組織化された軍隊の様なものから何の束縛もない形式だけのものなどその形態、活動は千差万別であるが、多くの冒険家は何らかのギルドに所属し、そこでモノや情報の交換を行っている。何の実績もない新人冒険家たちはギルドに加入することで取り敢えずのツテを作り、そこから徐々に人脈を広げていくのが一般的であった。私もその例に倣い、街のギルドを一つ一つ訪ねている。

が、目下30戦30敗中だ。

時期が悪いのか、運が悪いのか。とにかく訪ねる先全てで門前払いを喰らう。それでも諦めの悪い私は休むことなく次のギルドを探していた。

「悪いけど今は人手が足りててね」

今また私の連敗記録が更新された。

「そうですね。残念です」

「貴方、大分色々なギルド廻った様子ですね。余所の事言えないけど、この辺りでギルド員を募集しているところ、今は少ないですよ」

思わず吐いてしまった溜息に気付いてか門番の男が私に気遣いの言葉をかける。

「もしギルドに拘らないのであれば、今も加入者を募っているギルドが一つありますよ。傭兵ギルドなので若い子には大変かもしれないかもしれませんが、行ってみますか？」

傭兵ギルド、恐らくは傭兵たちに仕事を斡旋するギルドなのだろう。正直あまり興味はない。しかし今の自分がギルドを選べる立場にないことはこの数日で良くわかった。何よりもギルド探しに私は疲れてしまっていた。

「はい。行ってみます。是非教えてください」

取り敢えず“イエス”と答え、私は投げやり気味に『傭兵ギルド』へと向かった。

そのギルドは街の片隅にある古びた石造建築をギルドホールとしていた。その扉の前でギルドへの加入意思を告げる。扉番は億劫そうに頭を掻くと「少し待て」と言って建物の中に入っていく、暫くして長身の男と共に戻ってきた。

長身の男が私のすぐ目の前に立つ。男は私を見て訝しかんだよう

だ。その表情に笑みはない。

「こんにちは。加入希望ということですが貴方が？」

「はい。ブリッジヘッドのホルンと言います。冒険家です。ギルド員を募集していると聞いて訪ねました」

「ええ、はい。確かに新メンバーを募つてはいます。しかしうちも半端な者を入れるわけにはいきませんし、ある程度の実力がある方に限らせていただいているのですよ。素人では困るというか・・・。戦力として最低限の力だけは持つていて欲しいというのが私たちの考えです。」

「大丈夫です。戦力としては人並み以上にはなるつもりです。自信があります！」

「いや、しかし・・・」

男は少し言いよどむ。

「はつきり申し上げて貴方は女性で、しかもまだ子供です。こちらの求めているだけの力があるとは思えませんので、残念ですがうちでは迎え入れることはできません」

言葉を選んでいるようであったが、その口調から加入を認める気が無いことが伝わってくる。尚も「お願いします」と頼み込んでみるが私の頭の中には『ここもダメだろう』という思いが浮かんでいた。そんな上っ面だけの押し問答を繰り返していると背後から別の男の声がかかってきた。

「いいじゃねえか、バルデル。どうせテストするんだろ？それにそいつはマジで戦力になると思うぜ」

どこか聞き覚えのある声に私は後ろを振り返る。するとそこにはいつぞやの大剣の男が立っていた。今日は酔っていないようだ。巨大な剣を軽々と肩に担ぐ姿は何とも頼もしい。

「おお、バーニス。おかえり。・・・知り合いか？」

バーニスと呼ばれたその男はチラリと私に目を向けた。巨大な剣とガツシリとした体軀はそれだけで私を怯ませる。

「ああ。半年くらい前に世話になってな。まあ、死にそうなところを助けられて」

「死にそうなところ？どうせ酔って剣が握れなかったんだろ？」

「ハハ、そうだけど、俺が言いたいのはそこじゃなくてな。こいつサマナーだぜ。珍しいだろ？俺の見た感じだとこいつの召喚獣は十分戦力になるだろうしな。なあ？」

「はい！サマナーです。水の精霊を召喚できます」

急にバーニスに話を振られて少し声が上がった。それを誤魔化すために私はスウェルフアーを召喚した。

掌から光があふれ、私の相棒が姿を現す。少々慌ててしまったが無事召喚は成功した。どうだろうかと長身の男に目を向ける。

「ふむ。サマナーか・・・」

男はまだ考えあぐねている様だった。私とスウェルファーを見比べ腕を組む。

「サマナーいいだろ？俺の恩人だしよ。せめてテストくらい受けさせてやれよ」

テスト？そういえばさっきも言っていたが何のことだろうか？

「そうだな。試してから決めるか」

そう言って男は少しだけ笑みを見せた。

テストとは要は即戦力として使えるかどうかを測る実技試験のようだった。翌日の朝、もう一度傭兵ギルドのギルドホールへ行くところには私の他に5人の男たちがいた。一人は長身の男バルデル、一人は大剣の男バーニス、他の三人は私と同じ加入希望者のようだ。三人とも戦士らしい雰囲気を感じさせる。

そんな彼らと私、そしてバーニスを引き連れバルデルは町の往來を行く。道中の話から察するに彼はギルドマスターのようだった。

「テストはこの街の地下にある遺跡で行います。全員で遺跡を進み内部にある祭壇まで行くこと、そしてそこから帰ることが目的です。内部には多数のモンスターが生息しているためそれらの対処、対応から皆さんの实力を見て可否を決めます。案内と万が一の場合に備えての警護役として私とバーニスが同行しますが、基本的に私たちは一切の手出しをしませんので無茶はなさらないように」

「ん？バルデル、俺たちは手を出さないのか？まったく？」

「俺やお前が戦ったらテストにならないだろう。絶対に前線に出るなよ？自分に向かってくる奴だけ斬ったらいい」

見た目通りの戦士なのだろう、戦うことを制されてバーニスはいかにも不満そうだ。集団の最後尾でブツブツと文句を言いながつてくる。一方のバルデルは彼のそんな素振りを気にすることもないようだ。

そんな二人の様子を観察しているうちに目的のアリアン地下遺跡に到着した。地面に取り付けられた鉄の扉をスライドさせると一人人がやっと通れる程度の入り口が顔を出す。その先は地下へ続く細く長い階段だ。私たちはそれを一段一段降りていった。

階段を降り切るとそこは幅のある広い通路だった。空気の流れがないためか、ひんやりとしているのにどこか重苦しく不快だ。

内部は意外と明るい。それは両の壁に等間隔に取り付けられた電灯によるものだ。とはいえ数十メートル先まで見通せると言えるほどの明るさはない。その薄暗い闇の先からカサカサと寄ってくるモノの気配がある。目を凝らすとオオカミほどの大きさの巨大なネズミが数匹、通路の隅を這いながら近づいてきていた。

「ラットマンだ。俺たちの気配を嗅ぎつけて来たんだろう。戦闘になるぞ」

そう言ってバルデルは私たちの後ろに下がる。

「戦い方は任せる。ただし、はぐれる様なことはするな。祭壇までは一時間か一時間半で着くだろう。では、健闘を祈る。・・・行け」

その言葉と同時に私たちは一斉に駆け出した。

一人は剣を抜き払い、一人は槍を構え、一人は両手に曲刀を握りラットマンたちに向かう。私も彼らの後を追いつながらスウェルファールを呼び出した。

戦闘は一瞬だった。私たちとモンスターたちの距離が0になった直後、全てのラットマンが血飛沫をあげて倒せ伏す。私の出番もないまま、刃がモンスターたちの命を刈り取っていた。モンスターの血で汚れた刃を戦士たちは拭う。

後ろからバルデルたちの声が聞こえる。彼らの剣捌きを感じしているようだ。

それに振り返ることなく私たちは奥へと進んでいった。

その後も彼ら戦士たちの活躍は凄まじかった。ラットマン、フェイズスパイダーなど遺跡に巣食うモンスターたちをことごとく一撃のもと切り捨てていく。そこに焦りや苦戦は一切なかった。彼らに負けじと私やスウェルファールも精一杯に戦う。彼らにない遠距離攻撃での援護は戦士たちにも喜ばれた。

そして疲れが溜まってきた頃、私たちは祭壇のある一室に辿り着いた。

そこは20メートル四方はある大きな部屋で、一番奥にその祭壇があった。天井も高く、壁に掛けられた明かりだけでは部屋の天井部はほとんど見ることができない。振り返ると部屋で唯一の入り口はこの大広間には不釣り合いなほど小さかった。その上部には鉄柵が鎖で引き上げられている。あの柵を上げ下げすることが扉の代わりとなっているのだろう。

「お疲れ様。あとは来た道に戻るだけだが、疲れただろう？ 暫く休

もう」

言われて私たちは一息吐く。

疲れはあるが余裕もある。おそらくだが私を含めた全員が自分の合格を確信していた。

「よう、嬢ちゃん。調子は悪くはなさそうだな」

私がスウェルファーに水を与えているとバーニスが傍に腰を掛ける。

「この前逢った時は世話になったな。こいつにも礼が言いてえ。名前は？」

「スウェルファーです。水フグの」

「ほう。スウェルファーか。ありがとうな、スウェルファー」

武骨な手が無造作にスウェルファーの頭を撫でる。傍目にはグリと不快そうだが、意外とスウェルファーは嫌がらなかった。

「使える召喚獣はこいつだけか？」

「はい、スウェルファーだけです。」

「ほう。サマナーってのは結構二体、三体の召喚獣引き連れてるもんだと思ってたがな」

「そうかもしれませんね。でも、そもそも私サマナーとしての才能はあまりないと思うんです。スウェルファーとは偶然こういう関係

になれただけで、他の精霊とは上手く繋がれないんじゃないかなって」

「うむう。才能ねえ。良くわからんが、それだけそいつと仲良さげにできるならそれも十分な才能じゃないかと思うんだがな」

私に擦り寄るスウェルファアを興味深げに見ながらバーニスは唸る。

「神界の精霊やサマナーなんて高尚なもののことは俺みたいな脳まで筋肉な連中にはわからんか。まあ、才能なんて下らんもので悩むなよ？」

「悩んでなんていませんよ。偶然でもなんでも、こんな素敵な能力を持ったことはすごくラッキーだと思っていますもん」

これは私の本音だ。スウェルファアやサモニング能力は今や私にとってなくてはならないモノであり、この能力を与えてくれた存在があるならば私はそれに心から感謝している。

そんな話をバーニスと話す。話しているうちに彼の異様なプレッシャーにも慣れていった。

「あの・・・その剣なんですけど、かなりの大きさですよ？どれくらいの重さなんですか？」

「ん？そーだな。正確にはわからんが・・・、持ってみるか？」

そう言ってバーニスが私の前に剣の柄を突き出す。

「いいんですか？」と聞きつつも好奇心を抑えきれない私は返答も

待たずに剣に手を伸ばす。

握っただけですっしりとした重みが私の手に伝わった。更にバーニスが手を放すと剣の全重量が私の手にかかる。

——重い。

それは私の腕ではとても持ち上げることのできないほどの重みであつた。

何十キロ、いや何百キロあるのだろう？見た目以上の重さだ。こんなものを武器にすることが人間にできるのだろうか？

先程までこれを軽々と担いでいたことが俄かには信じられなかった。

「重いですね、想像以上に。こんな剣持てる人、世界中探してもいませんよ」

「そうだなあ。持ち上げるだけならともかく、それ持って戦える奴はそうそついねえな。まあ、筋肉だけが取り柄だし、これくらいはな」

自慢げに言いながら彼は自分の腕を擦る。ムサイが、見た目に反して中々好感の持てる人だと私は思った。

休息は長くはなかった。しかし帰りの体力を回復するには十分であつた。各々武器を担いで広間を後にする。

まずバルデルが部屋を出て、三人の戦士たちが後に続いた。私は部屋を出る前に今一度辺りを見回す。すると一瞬、熱い風が過ぎつ

た気がした。それは本当に些細で、気になるほどの違和感があったわけでもなく、私はそのまま広間を後にしようとしていた。

と、そこでバーニスの様子が少しおかしいことに気付いた。いつもの様に剣を担ぐのではなく、両手に握って辺りを窺っている。

「なんだあ、この感じは」

その様子が気になって私は彼に声をかけた。

「どうしました？」

「いや、何か変な感じがする。何かの気配があるような・・・、無いような・・・」

バーニスは尚も周囲を窺い続ける。その視線はやがて天井に向かい、その一点に目を凝らした。

私もその視線の先を見詰める。そこにある何かを見定めようとジツと睨みつけていると不意に天井から何かが飛び降りてきた。

ドズン、と轟音を上げ降り立ったそれは身の丈5メートルほどの巨大なモンスターだった。ずんぐりとした体躯に三つの光る目、そして三つ指の手に器用に握られた木の槌、その姿からただのモンスターではないことは一目瞭然だ。

そいつは着地するや否や真っ直ぐ私の方へ向かってくる。私にその超重量な突進を受け止める度量はない。一も二もなく私は飛び退ってそれを躲した。そんな私に目もくれず相手は真っ直ぐ走り続ける。部屋の入り口まで駆け抜け、モンスターはその槌を振りかぶった。

ガキン！

モンスターの槌が入り口に吊るされた鉄柵の鎖を断ち切る。再び轟音を響かせ、落ちた鉄の柵が広間の内外を分断した。そこで相手はこちらを振り返る。

「鎖を狙いやがった。気をつけろよ、嬢ちゃん。あいつ知能があるぞ。おそらく悪魔の一種だ」

「はい。わかってます」

突如現れたデーモンに恐怖がないわけではなかったが、不思議と私の心は落ち着いていた。一步一步近づいてくるデーモンの醜悪な顔も真っ直ぐ睨み続けられる。冒険に危険は付き物なのだ。

ホルン L V ・ 2 8 バーニス L V ・ 1 8 5

第14話（後書き）

引き続き駄文を読んでいただきありがとうございました。

まったくの未熟者ですが、無い知恵絞って一生懸命書かせていただきますので、今後もお付き合いいただければ幸いです。

また、誤字脱字のご報告や感想などをいただけると幸いです。

最後になりましたが、キャラクターの名付け親となって頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

後書きまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8617u/>

赤い秘石

2011年11月15日18時18分発行